

平成 23 年度 学位論文

発達障害児の保護者が望む障害理解に  
関する研究

兵庫教育大学院 学校教育研究科

特別支援教育学専攻 心身障害コース

M10096B 金子萌佳

## 目次

第1章 問題の所在と本研究の目的	1
第1節 問題の所在	1
1. 近年の障害者に対する障害の意識と理解の必要性	1
2. ノーマライゼーションについて	4
3. 近年の特別支援教育の現状と障害理解	5
4. 発達障害児の保護者の子育てにおけるストレス	6
5. 障害理解教育と家族における思考の関係性についての検討	8
第2節 本研究の目的	10
第2章 方法	11
第1節 対象	11
第2節 方法	12
1. 実施時期と手続き	12
2. 調査内容	12
3. 分析方法	12
第3章 結果	14
第1節 事例1 (Aさん)	14
第2節 事例2 (Bさん)	25
第3節 事例3 (Cさん)	40
第4節 事例4 (Dさん)	55
第4章 考察	65
第1節 障害を知った時から、現在に至るまでの心の変化	65
第2節 学校との話し合い	70
第3節 学校生活に必要な理解	76
第4節 障害理解に対する方法と内容	79
第5節 今後の課題	83
引用・参考文献	84
謝辞	

## 第 1 章 問題の所在と本研究の目的

### 第 1 節 問題の所在

#### 1. 近年の障害者に対する障害の意識と理解の必要性

現在、障害や障害児・者をめぐる社会情勢は、大きな変化を遂げようとしている。それは、障害児・者である当事者やその家族、または、専門家などの理解者が、障害理解教育や社会、個人に対して、地道に啓発し続けた結果である。障害観について、重要なことに世界保健機構 (WHO: World Health Organization) による障害の定義があり、障害理解学習にとって基本となる視点である。まず初めに、WHO は、1980 年に国際障害分類試案 (International Classification of Impairments, Disabilities, and Handicaps: ICIDH) が示された。ICIDH では、障害をインペアメント (機能障害)、ディスアビリティ (能力障害)、ハンディキャップ (社会的不利) の 3 構造として示し、社会環境の改善の必要性を訴えた。図 1-1 は、それらの関係を表したものである。

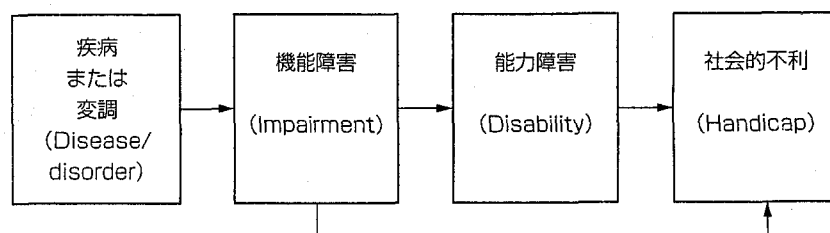


図1-1 国際障害分類 (ICIDH) 芝田(2007)

この分類は、当時画期的な分類として、評価されたが、以下のような批判や課題が指摘されている(芝田 2007)。

- ① 障害の原因を疾病に求め、治療を主要な目的とする「医学モデル」である。

- ② 障害者が顕在的・潜在的に保有する「アビリティー」に目を向けず、「ディスアビリティー」に焦点化しすぎている。
- ③ 機能障害→能力障害→社会的不利というようにベクトルが一方向に作用すると捉えている。実際は、「疾病の固定」が「障害」を意味するわけではなく、また、治療・教育・リハビリテーションは、必ずしもこの順序で遂行されるわけではない。
- ④ 障害の矯正、あるいは、個人による障害の克服に焦点化しがちである。
- ⑤ 社会的な面から障害を考えるという視点が不十分である。
- ⑥ 環境因子が加味されていない。

WHO は、これらの問題点から思考を重ね、2001 年に WHO 総会において国際生活機能分類 (International Classification of Functioning, Disability and Health: ICF) が成立する。この特徴は、これまでの ICIDH がマイナス面を分類するという考え方が中心であったのに対し、ICF は、生活機能というプラス面からみるように視点を転換し、さらに環境因子等の観点を加えたことである (厚生労働省, 2002)。また、これは、障害者のみを分類の対象としたのではなく、すべての人を分類の対象としていることも特徴である (芝田, 2007、山本ら, 2007)。図 1-2 は、ICF を示した図である。

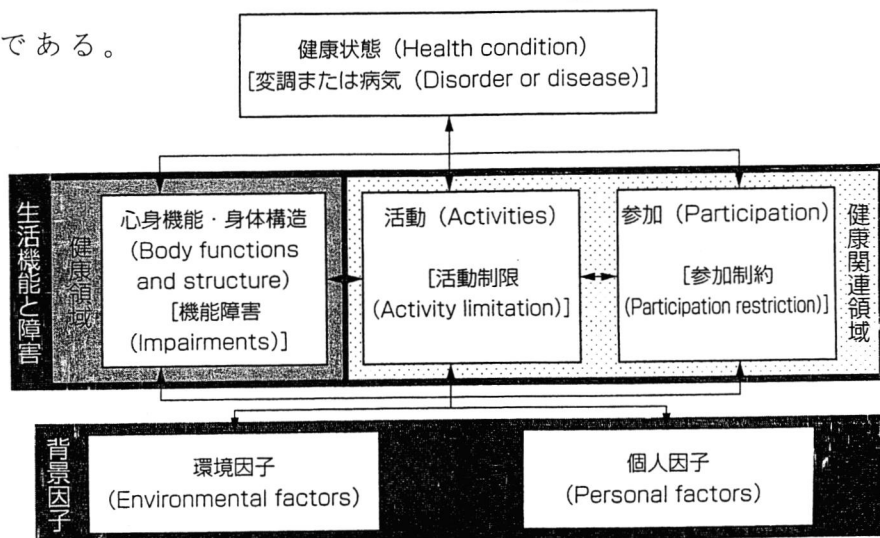


図1-2 改訂版国際生活機能分類 (ICF) 芝田 (2007)

この ICF では、生活機能(Functioning)を包括概念とし、健康領域(心身機能・身体構造)と健康関連領域(活動・参加)の 2 つを定め、分類は、心身機能と身体構造(身体レベル)、活動(個人レベル)、参加(社会レベル)となっている。そのうえ、障害(Disability)を規定してこの生活機能に対応させ、心身機能・身体構造は機能障害(Impairments)、活動は活動制限(activity limitation)、参加は参加制約(Participation restriction)として示されている。また、生活機能に大きな影響を及ぼすものとして背景因子が導入されており、それには環境と個人の 2 つがある。つまり、機能障害、活動制限、参加制約の 3 要素は相互作用し、さらに要素に対して環境因子と個人因子が背景因子として影響を与えるとされる。

さらに近年、経済優先の社会から、一人一人が自らの生活スタイルを主体的に選択し、個性豊かなものにしていこうとする「生活重視の社会」への転換が図られつつある(高橋,1997)。その代表的な運動は、1970 年代にアメリカで始まった、IL 運動であろう。IL 運動とは、自立生活運動で、重度障害者が、一般社会の中で、健常者と同じように、自分の意思で人間としての権利を主張、獲得して社会の一構員として参加することを目的とした運動を指す。この運動の理念は、身近の自立や経済的な自立生活は成り立つという新たな自立観を提起したのである。平岡(2003)は、この新しい自立観の鍵となったのが自己決定権の行使を自立と捉える考え方と述べ、具体的には「障害者がたとえ日常生活で介助者のケアを必要とするとしても、自らの人生や生活のあり方を自らの責任において決定し、また自らが望む生活目的や生活様式を選択して生きる行為を自立とする考え方であり、1 回限りの自らの人生を障害者自らが主役となって生きること、すなわち生活主体者として生きる行為を自立生活とする理念である」と示している。つまり、その人が、その人らし

い人生を過ごすための手段を考え、自らの人生を豊かにしようとする運動である。

その人がその人らしく生きるためには、いわゆる障害児・者への偏見といった意識の壁を改善していく必要がある。それには、障害のある人と障害のない人が共に生きることができる社会「共生社会」(奈良教育大学附属小学校,2005)の形成が求められる。そこで、内閣府は、2009年に「共生社会」に関する認知度を調査しているが、それは、15歳以上80歳未満の男女を対象に「障害を理由とする差別等に関する意識調査」である。それによると、「共生社会」に関する認知度について、その考え方を含めて知っている人の割合は22.2%、言葉だけ知っている人の割合は41.7%、知らない人の割合が36.1%である。「共生社会」について知っている人は、63.3%と6割しかみられない。また、理解度という視点から考えると「共生社会」を把握していない人が全体の約8割にも上る。さらにこの調査結果では、「共生社会」を知らない人の割合が20歳代は、40.7%、30歳代は、49.3%、40歳代では、38.7%と高い数字が出ている。このことから、小・中学校に在籍している児童・生徒の保護者の多くが、該当する20歳代～40歳代の障害に対する理解はあまり高くないことがわかる。この結果から、保護者に対する障害理解教育や社会啓発は特に必要だと考えられる。

## 2. ノーマライゼーションについて

芝田(2010)は、障害理解教育や社会啓発において、ノーマライゼーションの理念は、非常に重要なキーワードとなると述べており、その意味を障害者が通常と変わることはない生活をし、権利を享受できること、さらに障害者が社会に存在していることがノーマルであるという考え方

とそれを実現するための方法と示している。

ノーマライゼーションの理念の発端は、デンマークにおける知的障害者運動にあり、バンク＝ミッケルセンは、この運動の指導的役割を示し、理念の提唱者である。この理念は、スウェーデンにおいてニリエらによって、概念化、理論化が図られた。

### 3. 近年の特別支援教育の現状と障害理解

通知で特別支援教育の理念として、「障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ、様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の基礎となるものであり、我が国の現在及び社会にとって重要な意味を持っている」が示されている。

また、2007年4月からすべての学校において、障害の「種類」や「程度」ではなく、まず、一人ひとりの「教育的ニーズ」を見つめていこうとする考え方である、「特別支援教育」が学校教育法に位置づけられた。これにより、従来の特殊教育の対象の障害だけでなく、LD・ADHD・高機能自閉症を含めて障害のある児童・生徒の自立や社会参加に向けて、適切な指導・支援を受けられる環境が保障された。また、「交流及び共同学習」を通して、障害児に健常児・者が会える機会が増え、共通の時間を過ごすことが多くなっていると考えられる。これらの理由から、健常児・者に今まで以上の障害理解が求められている。しかし、社会は、障害児・者の人格、能力等についてその実態を見ず、過小評価し、障害児・者との間に無用な距離を置いてしまう傾向がある(芝田,2010)。このような状況を改善していくために大人のADD&ADHDの会(2008)は、障害児・者が過ごしやすい、よりよい生活環境をつくっていく必要があり、そのためには、親の理解はもちろんのこと、教育現場の理解や人間関係

への配慮などが重要であると指摘している。したがって、特別支援教育を考える上で、障害や障害者に対する誤ったイメージを改善する事は、障害児の障害の特性や個別のニーズに対応できる環境を作る上で不可欠である。

2002年の文部科学省の調査によると、特別支援教育の対象児は、学齢児の約8%といわれており、そのうち、通常学級に在籍する発達障害児は、約6%であった。その数は、年々増加していると考えられている。しかし、発達障害は、他の障害に比べ、障害理解が進んでいない。その理由として、発達障害は、当事者や保護者も障害について正確な理解が困難であることが挙げられる。

例えば、身体障害では、多くの場合、障害が見えやすく、また障害児・者本人にも障害の自覚があり、それゆえ、障害による困難の体験と障害との関係理解は比較的難しくない。また、疑似障害体験が可能な場合は、周囲の理解も求めやすい。一方、発達障害に見られる認知・行動上の特性は、障害として気付かれなかったり、認められなかったりすることが多くある。そして、専門職においても診断が困難であること、障害が表面化しづらいこと、障害の特性が周囲から理解されにくいことなどが先行研究では多く述べられている(本田・黒田,2007、渡辺,2009)。その他、発達障害に関する社会の認知度や理解度が低いことも原因の一つだと言われている。

先ほども述べたように、通常学級に在籍する発達障害児は、増加傾向である。そのため、発達障害への理解を深めることは、特別支援教育を進める上で希求の課題であると言える。

#### 4. 発達障害児の保護者の子育てにおけるストレス



次に、子育てを行っている人のストレスに注目し、その中でも、発達障害児を育てている保護者の実態に触れる。

障害のわかりにくさについて井上(2007)は、子育ての中で保護者自身に対する様々な不安やストレスを生むと同時に、得られるはずの家族や周囲からのサポートの不足、「しつけの悪さ」「子育ての問題」としての周囲からの批判や偏見にさらされる危険性があると述べている。

子育てにおけるストレスは、すべての保護者に共通してみられる傾向であるが、そのなかでも、障害のない児童の母親よりも障害児の母親の方が心理的・身体的にも負担が大きい(田中,1996、庄司,2007)。庄司(2007)は、保護者が抱えるストレスは、障害種によっても差異がみられ、発達障害児の保護者が、身体障害児や知的障害児の保護者より、高いストレス値を示したことを明らかにしている。朝倉(2008)によると、その原因の一つに、発達障害は、周囲に理解されることの困難さが挙げられており、本田・黒田(2008)が実際に発達障害児の母親にインタビューを行った結果、実際に子育て上で最も悩んだ事は、周囲から理解されないことであった。学齢期の発達障害児の保護者は、特に児童の障害理解を含めた障害への指導・支援や学習への指導・支援により児童やその家族への負担が軽減されることを望んでおり(前田,2009)、学校の教員に対しての理解だけでなく、周囲の保護者への理解の必要性も求められている(田中ら,2002)。このことから、発達障害児の保護者は、高いストレスを抱えており、その改善のためにも、周囲の障害理解・啓発を含めた指導・支援が必要と言える。また、一次的障害である発達障害についての理解が不十分なため、適切な指導・支援が受けられなかったり、二次的障害として発達障害児が、いじめ被害や不登校に至ったりする事例も報告されている。そして、保護者の中には、高いストレスから児童に、より厳

しい態度をとるようになり、虐待とされる状態に陥ることもあると言われている(玉井,2008)。発達障害児やその保護者が抱えるこれらの困難さへの具体的な対応例は、障害理解とその啓発をすすめるにおいて有効と考えられる。

## 5. 障害理解教育と家族における思考の関係性についての検討

ここでは、障害理解教育を進めるにあたって、家族の思考は大きな影響を及ぼすことを明らかにし、その関係性を述べる。

周囲に理解を求める際には障害の開示が前提となるが、発達障害に関しては未診断の者、あるいは、診断はあるが、あえて開示を希望しない者も少なくない。また、発達障害は、障害が表面化しにくいため、発達障害児のニーズを正確に把握できず、当事者やその家族による実践が先行しており、周囲の理解の研究があまり進んでいない(西館・徳田,2010)。

しかし、これまでも、教師と保護者が連携して、通常学校における障害のない児童に向けて、啓発が行われているが、障害理解が十分には言い難いのが現状である。その理由の一つとして、児童にとって、この世に生まれたときから一番長く接している人間である保護者の影響力は、遙かに大きく、障害のない児童・生徒の保護者の障害理解の不十分さから繰り広げられる家庭での会話や障害児と出会った時の態度が、障害のない児童・生徒に余波することが挙げられ、それが、障害理解が進まない原因となっている。そのため、障害理解は、障害の特性だけでなく、障害児を取り巻く周囲の対人関係も重要になってくると考えられる。吉岡・藤田(2000)は、上手な対人関係を築く時には、相手を思いやる気持ち(向社会的行動)とそれを上手く表出していくための社会的スキルが必要だと述べている。社会的スキルは、学習(観察、モデリング)など

を通して、獲得される行動である。したがって、児童が生活の中で、多くの時間を過ごす家庭は、学習のための重要な場になっている。児童が、周囲の人と円滑な人間関係を営むという向社会的行動には、適切な社会的スキルを身につける家庭環境が必要である。一般的に、人間関係をよりよい方向に向かわせる向社会的行動は、親子関係の中で、意図的なしつけや教育、児童に対する態度の影響を受けて発達していく。つまり、向社会的行動は、よりよい対人関係をつくる重要な行動であり、親の適切な養育態度がこの行動を高めていく。このことから、障害理解教育を進めるためには、障害のない児童の保護者の障害に対する理解とそのための啓発が重要である。

## 第 2 節 本研究の目的

様々なニーズ調査から、障害児の保護者は、周囲への理解を強く求めている。その理解の必要な周囲には、教員や障害のない児童の保護者といった教育関係、その他として、医療、福祉、地域などがあり、求める障害理解も様々であると考えられる。

本研究は、理解の必要な周囲の一つである障害のない児童の保護者に焦点化し、通常学級に在籍する発達障害児の保護者が、障害のない児童の保護者に対し、障害理解を適切に進めるためには、どのような啓発を望んでいるのかを明らかにし、そのあり方を検討することを目的とする。

なお、保護者は、学校の体制や教員などに対しても適切な障害理解を求めていると考えられることから、これらに関してもその実態や課題について考察する。

## 第 2 章 方法

### 第 1 節 対象

対象者は、兵庫県に在住の発達障害児の母親 4 名とした。なお、発達障害児全員は、小学校を通常学校に在籍していることを条件とした。対象者と発達障害児のプロフィールは、表 2-1 に示す。

表 2-1 対象者と発達障害児のプロフィール

母親	児童	小学校時の在籍クラス
A	a (中学 2 年生・男)	入学当初は、特別支援学級に在籍していたが、小 1 の時に通常学級に移籍
B	b (小学 2 年生・男)	特別支援学級
C	c (中学 2 年生・女)	通常学級
D	d (特別支援学校高等部 1 年・男)	特別支援学級

## 第2節 方法

### 1. 実施時期と手続き

インタビュー実施期間は、2011年7月1日～23日であった。手続きは、半構造化による個別でのインタビューを行った。記録の方法は、全対象者に録音の了解が得られたので、ICレコーダーを用いた。所要時間は一人につき、90～150分であった。

### 2. 調査内容

初めに用意した対象者すべてに共通する調査内容は、プロフィールに加えて、以下の4項目である。しかし、半構造化面接を行ったため、結果的に共通の質問の追加、個人のみの質問もある。

- ①障害を知った時から、現在に至るまでの心の変化（お名前と、お子様はどの障害であるか、また、通っておられる学校を教えてください。）
- ②学校との話し合い（なぜ、通常学校に通わせようと思ったのですか。）
- ③学校生活に必要な理解（どんな理解があれば、もっと子どもの学校生活がよくなると思いますか。）
- ④障害理解に関する方法と内容（障害理解を進めるために、どのような方法や希望がありますか。）

### 3. 分析方法

本調査では、通常学校に在籍する発達障害児の保護者が障害のない児童の保護者に対し、どのような障害啓発を望んでいるのかを明らかにし、そのあり方を検討することを目的としているので、インタビュー内容とともに語られた背景や当時、発達障害児の保護者が感じた気持ちも重要な観点となる。そこで、分析方法は、以下の通りとした。

- ①すべてのデータを文字化した。
- ②文字化したデータをコードにわけた。
- ③詳細に事実を把握する為に、コードの中にあるキーワードをエピソードとともに拾い、KJ法を参考にグループ化した。なお、グループ化は、筆者と大学院生1名とで行った。
- ④グループ化した内容をまとめ、それぞれに結果と考察を示した。

また、結果の表記について以下のようにする。

- ①グループを1、2、・・・として先頭に示す。
- ②カテゴリーは1)、2)・・・として示す。
- ③サブカテゴリーを(1)、(2)・・・と示す。
- ④サブカテゴリーの中に、さらに細かいカテゴリーが得られた場合〈〉、  
《》として示す。
- ⑤【A〇〇】などの表記は、考察において、発達障害児の保護者の発言を示すために用いた。
- ⑥インタビューの中で、省略された主語や修飾語は（ ）内に示した。

### 第 3 章 結果

#### 第 1 節 事例 1 (A さん)

##### 1. 障害を知った時から、現在に至るまでの心の変化

【A01】障害がわかった時期は、早かった。初めは、保育園での場所見知り激しい、舞台上がったら、泣き叫ぶなどの状況があり、保育園の先生も気になっていた。その後、1 歳半健診の時に「発達個人差がある」って言われたが、私 (A) は、あまり気にしていなかった。しかし、保育士が違う市にある医療センターに行く事を促し、一緒に行った。そこで、「自閉傾向がとても強い」と言われ、障害がわかった。しかし、どうしたらよいのかわからず、ドクターショッピングをしたが、どこも同じだった。そんな中、障害について勉強会を開いている人との出会いがあった。その人から手紙をもらったり、勉強会や本を通して、わからないなりに知識をいれられたのがよかった。

【A02】心のよりどころは息子 (a) が幼い時は、親の会。息子 (a) に障害の診断が出たのをきっかけに、療育休暇をもらい、その期間に親の会を立ち上げて活動したが、仕事復帰のために引退し、今は、年賀状だけの関係になっている。また、親の会は、平日にあるので、仕事を持っている人は、参加できない。孤独といえば孤独である。

【A03】恵まれていると感じたのは、自閉症の勉強会を開いている人と出会えたこと、保健師の理解があったこと、立ち上げた親の会が理解があったこと、おなじ境遇の母親に出会え、話をきいてもらえたこと。

【A04】小学校入学前から、大学で行われている、療育を受けられた。これにより、自分 (A) の想いも話せたし、息子 (a) との関わり方を早くから学べたこと、そして、息子 (a) の成長が親にとってすごく励み



になった。息子（a）の成長に救われながら、視覚支援などを取り入れることが出来た。息子（a）の持っている運の強さだと思う。

【A05】兄（障害のない児童、aの兄）がモデルになってくれた。また、私（A）が忙しい時には、面倒をみてくれた。

【A06】勉強する機会があってよかった。他の人から見たら、そんなに出来ていないかもしれないけど、自分（A）なりに巡り合わせもよく効率よく、悩みながら、知ることができた。当事者だから知りたいという気持ちが強く、また、知ることによって安心できたっていうことがすごく大きい。

## 2. 学校との話し合い

### 1) 通常学校を選んだ理由

【A07】地域の子ども達と共に過ごせるのは、保育園、義務教育を入れて、15年だけ。その機関、に地域で過ごす機会がなかったら、息子（a）は将来どうやって暮らしていくのか、この期間に地域の子ども、親と関わらなかったら息子（a）の地域での生活はどうなるのか、と考え、通常学校に進学を決めた。

【A08】少なくとも、義務教育の間、地域で暮らすことが、プラスになると思う。

【A09】支援学校は考えなかった。

【A10】先生は、一年で変わるかも知れないけど、子どもたちは、ずっと関わって行くかも知れないから。

### 2) 入学前の話し合い

【A11】私（A）から連絡を取った。

【A12】保育園の時に、体験入学があり、その際に「地域の学校に行き

たいです」と教育委員会に伝えた。そして、(A が、入学予定の通常学校に)「4月の担任が決まり次第、連絡を頂けませんか」と伝え、連絡をもらった。そのあと、教室や入学式の会場など、スケジュールは私(A)が用意するのでとりあえず、学校の方と一緒に行かせてもらった。

【A13】入学前に対応にあたった人は、支援学級の先生が体験入学の時にいて、そのまま対応してくれた。時期は、保育園の年長の4～5月くらいから動き出した。「介助の先生を付けて欲しい、地域の学校に通いたい」ということを話した。

### 3)入学後の話し合い

【A14】入学が決まってから、同じ学年の(障害のない児童の)保護者に話す機会を、作ってもらった。しかし、入学式後ではなく、2回目のクラス懇談会だった。その会は、希望者のみが参加するので、限られた人数に対して、話した。

【A15】引き継ぎは、非常にいい加減だった。新しく赴任してきた教員が担当し、引き継ぐ気がないので、私(A)がサポートブックを作り、「せめて、学校で、どんな支援をしているのか、まとめて欲しい」とお願いした。教員が書き込みをしたサポートブックを私(A)が、新しい担任に渡すという形で引き継いだ。しかし、小学3年時の介助の先生は、サポートブックへの記入を拒み、私(A)は、自分の想像で、新しい担任に伝えた。

【A16】障害のない児童の保護者への啓発よりも、学校に対してアプローチを行った。

## 3. 学校生活に必要な理解

### 1)学校の様子

### (1)学校の障害理解の様子

【A17】取り出し授業を希望していたが、教員から、「取り出しができない」「学力保障はできない」と言われ、ショックだった。

【A18】小学校入学当時は、特別支援学級で過ごしていたが、二学期くらいから、「学校に行きたくない」と言うようになった。理由は、支援級の先生が、スケジュールを立ててくれないこと。そこで、スケジュールを立ててもらうことを希望したが、支援級の先生が、拒否したため、全ての時間を通常級で過ごすようになった。しかし、環境に慣れずに、保健室が逃げ場となった。保健室の先生が、理解があり、私（A）も息子（a）も頼った。

【A19】支援学級には3~4人くらいいた。しかし、息子（a）が困った時には、保健室に行くという援助を受けていた。

【A20】取り出し授業は、全くなかった。6年間勉強を教えてもらった記憶はない。ただ、2年生の時の介助の先生がセンスのある人で、息子（a）に筆記で授業内容を教えてくれた。それは、ある程度プラスになった。しかし、3年生以降の介助の先生は、「勉強は教えてはいけないんだ」と。ただ付いているだけという、ことで3年から6年までの間は子ども（a）は、授業中はじっと我慢して、座っているのが学校と、すごくもったいない時間を過ごした。

【A21】学校から啓発している様子や提案は、ない。学校のカリキュラムの中では、4年生で総合の福祉の中触れるだけで終わる。たぶん先生にとっては、障害っていうものの比重っていうのが、すごく低いと思う。大事だと思っているのは、私（A）が家族だからかもしれない。でも、いろんな意味で学校が、いろんな人と暮らすとすれば、いろんな人がいるんだということを理解するっていうことは、（障害のない）子ども達に

とって、すごくプラスになることじゃないかなと思うが、価値観の差だと感じる。

【A22】2年生の最初から、国語や算数の取り出しを希望し、教員もこれを承知した。しかし、クラス替えがあったため、「慣れてからのGW明けから取り出しを始めたい」という教員からの申し入れがあった。私（A）も納得したので、了承した。しかし、GW明けに学校から呼び出され、「時間の関係で取り出しできない」と言われた。「どうしても取り出しして欲しいというなら、無理にするが、学力保障はできない」と言われ、ショックだった。「先生がそういうなら、もう通常級でいいです。」先生も忙しいのだろう。その後、「Aさんは、個別で取り出しを希望されていない。だから私が支援をしたくてもできない。」と（2年の担任に）様々な所で言われていることを特別支援学校のコーディネータに、息子（a）の様子を聞かれた時に教えてもらった。ほんとに信頼できない先生と付き合いながら、中途半端で学力保障もされないまま、通常級メインで、6年生まで過ごした。

## （2）学校の障害理解教育について

【A23】学校が行っている障害理解教育は、子ども達に差別を植え付けているものだった。

【A24】学校の支援学級に対する考えが、以前在籍していた障害児がベースとなっており、親が訴えるとモンスターペアレント扱いされた。また、市が、特別支援教育への理解が遅れた場所であるので、悪条件が重なっている。

【A25】小1の時に、送り迎えをされていて、5～8人の（障害のない）子どもと一緒に帰っていた。すると一人の子が、息子（a）が在籍している教室を「あほな子がいる所なんやろ？」と聞いてきた。疑問に思ったら、1～3

年の子が、息子（a）の参観に行って、（障害のない）子どもが「あほな子」と言っているのを先生も知っている。学校がやっている障害理解教育は、（障害のない）子ども達に差別を植え付けている」と言わせてもらった。そうゆう教育をすると聞いていないし、そんなことがあっていいのかと思う。（障害のある、障害のない）子ども達が一緒に遊べる。（障害のある）子どものいいところを伝える機会を作るなら、納得ができるが、自分よりも下の子を見るように来るのは、それは教育じゃない。（障害のある）子どものいい所が全く伝わっていない。実際に、小5の時に、「雑草もいろいろある、特別支援学級は、とにかく個性があって・・・」みたいな授業をしていたと息子（a）から聞いた。つまり、障害理解教育を低学年は見学、高学年は、支援級の先生が授業に行く。（aが通っていた学校で行われていた障害理解教育は、障害のない低学年の児童は、aが、特別支援学級で授業を受けている様子を見学に行くことが行われており、そして、高学年の障害のない児童には、上記のような「雑草もいろいろあるのと同様に特別支援学級に在籍している児童も個性がある」という形で特別支援学級を担任している教員が授業を行っていた。）

【A26】6年間、クラスの生徒には年齢に合わせた形で、子ども（a）の障害の事を含めて、話させてもらった。間接的でもそれが（障害のない児童の）親に伝わり、何人かの親が「話してくれてありがとう」と声をかけてくれた。つまり、子どもから親への繋がりがあった。

### （3）Aさんが障害理解を進めるために実際に行ったこと

【A27】通常学校に通っていた子の先輩の（障害児の）親に、「通常級の子の保護者にアピールするのがいい」と聞いていたので、保護者懇談会には、必ず参加して、通常級の保護者に対して、話をする時間を持つように努力した。しかし、学校から「話さなくてもいい」と拒否されるこ

ともあった。

【A28】小学 2 年の時に、支援級学級の教員の理解がないため、教員向けに、通信を出した。その一部を保護者に配ったら、「親にも配ってほしい」と言われたが、枚数も多いため断念した。しかし、気にかけてくれる人は、何人かはいた。

#### 〈通信の内容〉

【A29】障害の特性と自閉症の特徴をわかりやすく、エピソードを添えて書いた。次号から、支援の仕方などを書いた。情報把握が苦手など。

【A30】教員は、あんまり支援をしてくれなかったが、支援をしてくれた物があつたら、(全ての)職員に紹介したいという思いから、大げさに書いた。支援学級を初めて担当して、負担だったのかもしれない。

【A31】支援級の先生は、孤独である。だから、出来るだけ、大げさに書いて、「ウチの子助かっています」と伝えと(特別支援学級の)教員は、救われるかなという意図もあった。

#### 〈通信を見た教員の反応〉

【A32】モンスターペアレントとして、作り上げられていたこと、前に通っていた支援級の親と違って、最小限の事は言ってきたことがあり、教員も、「私(A)から避けたい」みたいな形もあった。

#### 〈通信を配った時の A の気持ち〉

【A33】「学校はなぜこんなにひどいことするの」とくじけそうになったが、私が一生懸命関わった分、学校は冷たかったけど、(障害のない児童の)保護者は、割と優しかった。もっともっと優しかったのは、周りにいた(障害のない)子ども達が、関わりを持とうとしてくれたのでやっていった。

【A34】先生の理解は、すごく大事。子どもを人質に取られている気分

だった。

## 2)学校や教員が必要な理解

【A35】学校の先生に障害に対する理解があれば、親がこんなにしゃしゃりでなくても、色んな面で子ども同士の関係作りが上手くいく方法があったのではないかと思う。

【A36】障害のない児童の保護者より学校に対する啓発の方が強い。

## 3)障害のない児童の保護者について A が思っていること

【A37】(障害のない人が障害や障害理解について)若い頃に刷り込まれ、感情的に脳が理解してしまっている。いくら新しい知識を入れても、変更できないことはある。表面的には言ってはいけないと思っているが、心の奥底まで怖い思いをしたなどの経験は消えないと思う。だから、障害者に追いかけられた経験やパニックになった時に遭遇した経験がある人の気持ちは、消えないと思う。知識では、すり替えられない部分はあると思う。だから、障害のない児童の保護者に完璧に様々な事を理解してもらうことは個人的には難しいと思う。ただ、多くの人は、いい人なので、機会があれば、知識として、理解してくれる部分はあると思う。

【A38】障害のない児童の保護者さんにとっては、特別支援学級ってというのは、勉強が遅れている子が行く所、とか何もしゃべれない子が行く所、自分たちよりも能力が低い人たちが行く所だという理解だと思う。想像だが、親御さんはストレートには言えないけど、そうゆう認識だと思う。

【A39】(障害のない児童の)保護者が、障害そのものについて学習する場はない。だけど、「障害があるから、差別はいけない」という常識的な方が多いので、「どうしてる？元気？」と話しかけてくれる保護者は何人もいた。それは、嬉しかった。

【A40】土地柄かも知らないが、研修会を開いても反応はいまいちだった。

#### 4. 障害理解に関する方法と内容

##### 1) 学校や教員に対して求めている方法と内容

【A41】理解しようとする気持ちがあるだけでも救われるが、学校が、開かれていないのが、一番理解が進まない原因だと思う。知ろうっていうノウハウを得ようとする雰囲気作りが大事。

【A42】障害特性などを勉強して頂ことがすごく大事。教員が、「勉強しよう」と思う人の時には、様々なことが動いていく。やはり、(障害のある)子どもを理解しようとしないう先生が来ても支援は出来ない。具体的な方法として、「職員研修の充実させること」「管理職が、理解を持ち、個別の指導計画の作り方を教員に徹底する機会を作り、特別支援学校のコーディネータなどを利用して、様々なノウハウを聞けるような体制を作ること」「専門家に相談するような開かれた学校を作ること」。

【A43】同年代の子(障害のある児童、障害のない児童両方)がいるうちが限られている、学校で障害理解を正しい形で、積み重ねていくことで、親になったときに、その素養ができていると思う。すぐに効果はでなくても、学校間に障害理解に関する格差はあっても、何らかの効果は、あると思う。

##### 2) 障害のない児童の保護者に対して求めている方法と内容

【A44】結局は、(障害のない児童)親の考え。親が障害に対して、偏見を持っていたら「ふ〜ん」で終わる。親が、障害のある人と関わりがあったり、自分もサポートしたいと思っている親であれば、どんどん話していくだろう。しかし、今更、親に向けた啓発は難しいと思う。今度、親が、障害者と関わりを持とうとするときは、第二の人生の時か、自分が障害を持った時か、家族の中で障害を持った時で初めてだと思う。

【A45】通常の保護者さん(障害のない児童の保護者)達がそれを知りた



いかどうかって思うかどうかっていうのは、まだハテナの部分ではある。でも、発達障害児に対する支援は、子ども（発達障害児、障害のない児童両方）を伸ばす支援や丁寧な支援と重なっている。だから、「障害」ではなくて、「子育て」という意味で知ってもらえたら、いいと思う。保育園や小学校にある、子育て研究会の中に発達障害児への配慮など入れてもいいのではないかと思う。

### 3)学校と障害のない児童の保護者両方に対して求めている方法と内容

【A46】価値観とか差別とかは、周りの大人たちの態度で、左右されるとすごく感じた。親と学校がリンクすれば、「障害っていうのはそういうものだ」と理解が深まる可能性がある。

【A47】方法はたくさんある。授業の中で、福祉の分野があるので、通信から発信して、それを保護者が受け取って、フィードバックするなど、そんな啓発の仕方もあると思う。しかし、あまりされていないのが現実である。

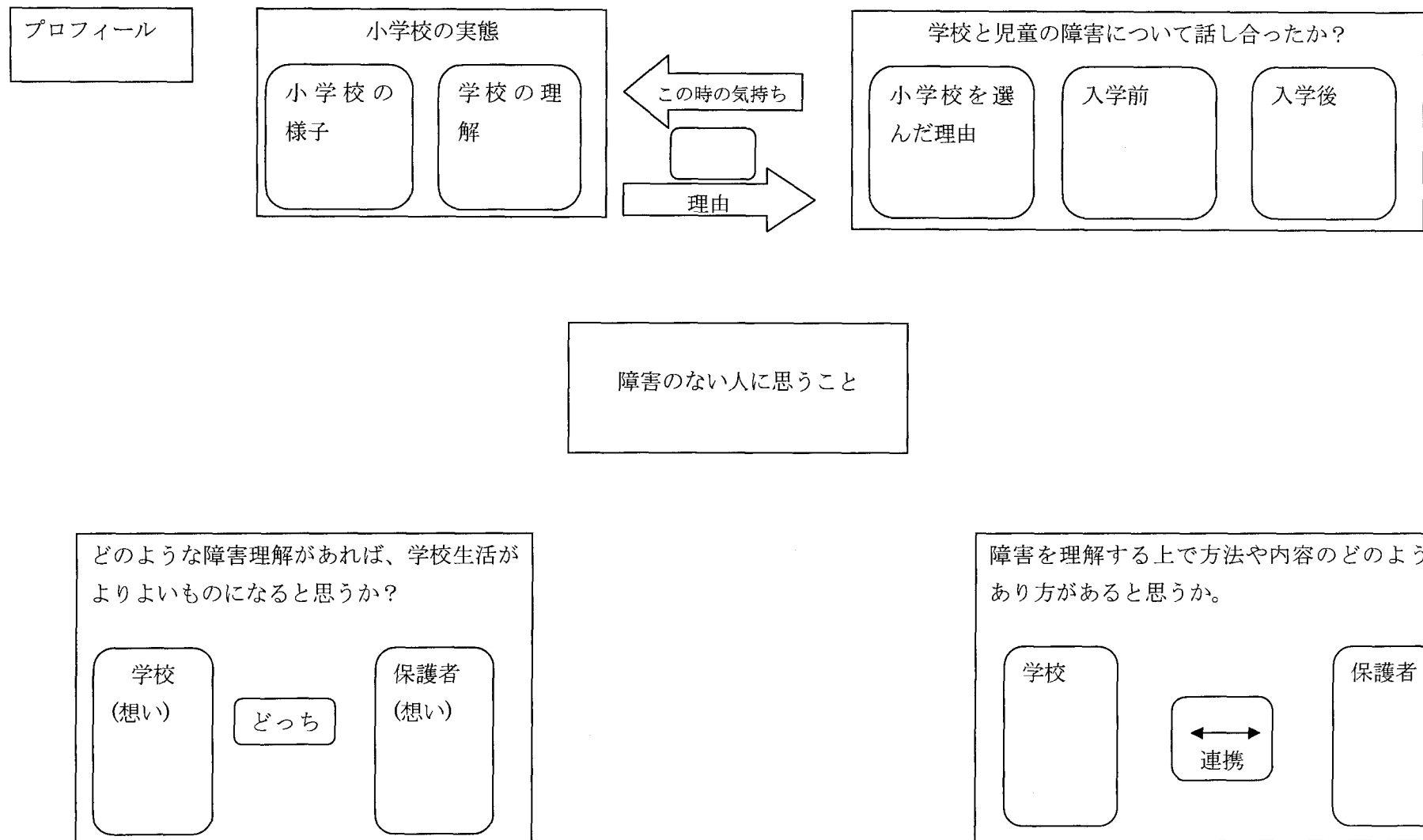


図 3-1 A のインタビュー結果について KJ 法を参考にした図

## 第 2 節 事例（B さん）

### 1. 障害を知った時から、現在に至るまでの心の変化

#### 1)B 自身の心の変化

【B01】二ヶ月っていう早い期間で立ち直れたのは、人に話せたから。

【B02】今でも不安と隣合わせ

【B03】「辛いことがあると誰かに頼ることができる」これが前を向けるきっかけになった。

【B04】息子（b）を可愛いと思えて幸せ。障害児の親にも、子どもがかわいいと思える幸せを味わって欲しい。

【B05】障害がわかってから、療育の本を読みあさり、しなくてはいけないことなど一通り考え、自分の葛藤や失敗、苦しい想い、今もあるが「知ることが全て」だとわかった。

【B06】「ありがとう」や「おはよう」など、当たり前だと思っていたことが、実は当たり前ではなかったことを息子（b）が教えてくれた。

【B07】担任の先生に「すごく元気になる」と言ってくれる。

【B08】初めは、「この子をどのように育てていこう」「どうやって周囲の中に置いとかなくちゃいけないのか」「自分の子は、どれだけの人に支援してもらわなくてはいけないのか」と思っていたが、それが「b ちゃんのおかげで・・・」と言ってもらえる。親にとったらなにより幸せな一言。

【B09】話を聞いて頂ける機会を設けてもらえるだけであり難い。

【B10】私（B）も専門的に勉強したい

【B11】初めから人に言えるようになったわけではないし、自信もなかった。話す機会があれば、喜んで話したり、声を聞かせてもらったりしている。

【B12】障害児が持っている力は、すごい。

【B13】当たり前を手をつないでいた登下校も最近手を話して行くようになった。お姉ちゃん（障害のない児童、bの姉）の時は、当たり前で離して歩いていたのに、息子（b）の将来を考えて、手を話すようになった。しかし、手のぬくもりやどこかに走って行ってしまうか不安です。でも大人になって、手をつないで歩くことは悪いことではないけど、世間一般的に見て、早いうちから手を離して歩けるようにしなくてはいけない。一般的といわれるこの世の中で、心地よく暮らせるためにも手を離そうとした。

## 2)B が関わった他の発達障害の保護者が感じていること

【B14】なぜ子どもがかわいいと思えるのかわからない保護者もいる。

【B15】「子どもを見れない、受け止めきれない、障害であって欲しくない」って思う。障害が目に見えない分、受け止めることが難しい。実際に「黙っていたら、障害はバレない」と言っている人もいた。

## 2. 学校との話し合い

### 1)通常学校を選んだ理由

【B16】保育園が息子（b）を積極的に受け入れてくれたから

【B17】息子（b）の進学先について、様々な所から、話がきた。

【B18】悩んだのは、通常学校に特別支援学級がないこと肢体不自由の子はいたが、発達障害の子はいなかったなので、作ってもらった。

【B19】一番こだわったのは、地元。息子（b）は、一生誰かに頼りながら、誰かの手を借りながら、生きていくことになると思う。私（B）もそうすべきだと思う。ただ、出来る限り、自分で出来る事は、自分で出来るようになって欲しい。それができれば、息子が息子らしく生きていけると思う。

【B20】自分（b）で、スケジュールを立てて生活できるようになることが目標だし、一番の願い。そう考えた時に、地域でのつながりがすごく大切だと感じた。

【B21】息子（b）の存在を良いところも悪いところも含めて、迷惑かけている所もすべて知って欲しかった。長い目で見て、通常学校に進学を決めた。

【B22】心理士に「今も大事だが、今がなぜ大事かというと、10年後20年後の息子さんの姿を想像して、今を考えるんです」言われたから。

【B23】親は、いつまでも悩む。

【B24】特別支援学校を拒否しているわけではない。特別支援学校は、支援学校の良さがあって、未だに息子（b）を通学校の支援学級に行かせたことが、息子（b）にとって良かったことなのかと迷う。「私（B）が、支援学級に行かせたかっただけではないか？」と不安になる。

【B25】特別支援学校の専門的な先生が多い所で、育つ方がいいのではないかと不安と葛藤がある。自立活動や身辺活動は支援学校の方がしっかりしていると感じる。通常学校にいと目標にしていたことやしたいことができていないことがたくさんある。でも、健常児の中で色んなことを吸収している。

【B26】姉（障害のない児童、bの姉）もいるから

【B27】入学前、専門家に相談した。「支援学級ができるかもわからない。下配の先生が付くかもわからない。それだけのリスクと覚悟が必要」と言われた。

【B28】早くから社会の荒波にもまれて欲しかった。

【B29】通常学校に通わせる一番のメリットは、健常児の中で過ごすということ。だから同じ活動はできなくても、みんなという時間、教室に居る

事が目標。出来る限りみんなと一緒に。

## 2)入学前の話し合い

### < 保育園 >

【B30】心理士からのアドバイスと不安もあり、私（B）からお願いして話しあった。基本的に園長と話しあった。主任の先生と担任は、3月に決まった時点で何度か話しあった。内容は、息子（b）の特徴、生い立ち、頑張っていることなど。その結果、準備は、手厚くしてもらったと感じる。息子（b）も2、3週間で慣れた。

### < 小学校 >

【B31】小学校入学前の6月に入学予定の小学校に支援学級の新設の申請を県にしてもらった。息子（b）の存在も伝えていた。支援学級が新設されなくても通常学校に、私（B）が仕事を辞めてまででもお世話になろうと思っていた。申請してから、入学前の2月に新設決定の連絡を受け、すぐに小学校と連絡を取った。内容は、生い立ち、支援グッズの持ち込み、保育園の様子など。担任が決まったら、また連絡をしてもらい、息子（b）の教室になる所で話し合いを行った。かなり準備に時間を費やしてもらい、手厚くしてもらった。その結果、小学校にスムーズに移行できたと思う。

【B32】入学前の準備はすごく大事だと思う。先生の理解が大きい。こちらの要望に応じてくれたのが大きい。

【B33】保育園から小学校入学の引き継ぎはしてくれた。

## 3)入学後の話し合い

【B34】私（B）が教師間に入って、引き継ぎしていることが大きい。正直もっと引き継いで欲しいと思う。

【B35】保育園、小学校1年時の担任は、初めの2～3ヶ月はずっと連絡を取り合ってくれていた。

【B36】小学1年生から小学2年生にあがる時は、もっとしっかり引き継ぎをして欲しかった。しかし、学校全体で、息子（b）を見守ってくれていると感じるので、そんなに負担はなかった。

【B37】今は、支援学校の先生に相談に行っている。

【B38】支援方法は、常に支援学級の担任と話しあって決める。先生からの（次の支援・指導方法についての考えなど）提案もある。内容は、運動会や学会は、先生と作戦会議。先生が「どうしよう」と言ってくれるので、言いやすい。先生と気持ちが一緒なのが、大きい。運動会のリハーサルで二人で考えていた支援方法が上手くいなくて、先生が家まで来てくれて、二人でやり直した。先生が決めたことも必ず連絡くれる。

### 3. 学校生活に必要な理解

#### 1) 学校の様子

##### (1) 学校の障害理解の様子

##### < 保育園での様子 >

【B39】心理士が保育園の巡回に来てくれた。そして、保育園の先生にアドバイスしていた。そのアドバイスを先生は真剣に聞いていた。

【B40】私（B）と心理士と保健師と子どもが相談に行くところに、保育士も来てくれた。言葉の教室も療育プログラムも来てくれた。月一回だけ、その時に保育士と言葉の教室の先生は、話し合いをしてくれていた。保育士が支援方法について悩み相談を専門家にしていた。

##### < 小学校での様子 >

【B41】心理士のアドバイスもあり、国語算数は取り出して授業をしているが、基本的に、通常クラスで生活している。しかし、定型発達の子と同じ活動が出来ていないことの方が多いと思う。例えば、図工の時間

に、みんながやっていることを見ながら、息子（b）は、先生と塗り絵をしている。活動は違うけど、できるだけ同じ教室で過ごさせるようにしている。

【B42】実際学校で、（障害のない）年下の子に馬鹿にされる事はあるし、「なんで」と聞かれることは多くある。

【B43】小1の先生はプライドが高く、経験もある先生だったので、不安だったが、保育園の先生に相談してくれたので、保育園の先生もアトバイスしやすかった。

【B44】先生が学ぼうとしてくれるのが大きい。

【B45】特別支援学校に行って相談する時も、支援学級の先生が付き添ってくれる。

【B46】保育園と小学校が近くにあったこともあるが、幼小中の連携を意識している。また、保育園の対応が一生懸命だったので、小学校も「負られない」といった感じで動いてくれた。

<Bが他の通常学校に通う発達障害児の保護者から聞いた話しから思うこと>

【B47】保護者の要望に対して、園や地域によっては「出来ない」という所もあったり、すでに障害児が所属している所では、「ウチのやり方です」と言われていたかもしれないと感じる。

【B48】プライドや経験のある先生がいて、お願いをしても聞いてもらえない、（発達障害児の）親は参加させてもらえないといった話は、親の会からよく聞く。

## （2）学校の障害理解教育について

【B49】6年生と交流して、息子（b）を正しく理解してもらう機会を作った。今年は、3月に息子（b）の（障害のない）同級生と交流の機会を



設けて、話をさせてもらう機会を作ってもらっている。

(3)B が行った障害理解を進めるために実際に行ったこと

<障害のない児童に対して>

【B50】小学生に話をする時にも、「なんで？」と聞かれることは多くある。独り言を笑われたり、アニメキャラが好きで「赤ちゃんみたい」という子もいる。それを逆にとって、「b は、一つの事が好きになったら、とことん好きなんだよ。それはなかなかできることではないから、すごいでしょ？ どう思う？」と話している。

<発達障害児の保護者に対して>

【B51】母親通し（障害のある児童の保護者同士）の付き合いで、意見を言い合うこともある。小学校5年生なので、自然教室があり、親も「子の子を預けられるか？」とそれまで介助してくれていた人が変わったのもあるが、参加を迷っていた。ここは、お母さん通しの付き合いでサポートブックを作って、一回チャレンジすることを勧めて一緒に作った。学校との連携がうまくいってないので、親は半ば諦めていた。「これ以上言っても、想いは通じないから、もういい。」と思っていたので、親の出来る事はしていかないか？って言った。先生の下承も得て、結果、自然学校はバッチリだった。

<障害のない児童の保護者に対して>

【B52】（障害のない児童の保護者に）直接啓発したことはない。通信を通してと、同級生の保護者には、懇談会の時に、今の息子（b）の様子を常に話すようにしている。

<学校や教員、障害のない児童とその保護者に対して>

《通信の現状と内容》

【B53】保育園と現在通っている小学校全家庭に二ヶ月に 1 回通信を配布

している。

【B54】1～6年まで150枚くらい印刷する。

【B55】内容は、息子（b）の面白い所を自慢している。

《通信を書くようになったきっかけ》

【B56】時期は、保育園入学を機に始めた。

【B57】家で使用している支援グッズの持ち込みだったり、下配の先生が付いたりするので、特別な形での保育園の入園になった。送り迎えの保育園なので、迎えのたびに見られるのが嫌だった。「恥ずかしいことではないので、こそこそしたくない！」と思った。

【B58】初めに（障害のない児童の）保護者に息子（b）のことを話してから、入園させてあげたかったので、入園式後の保護者総会で、bのプロフィールを書いた紙を配った。内容は、自閉症のこと、苦手な事、下配の先生が付くことなど。そして、入園先を迷ったが、地元で出来る限り、可能な限りこの地で育てたいと思っていること伝えた。共感してくれる人がたくさんいた。その中のある一人の（障害のない児童の）お母さんが、電話をくれた。そこで「そうやってはっきり伝えてくれて嬉しかった。これからも、息子（b）さんの様子を知らせてもらえないだろうか？」って言うてもらい嬉しかった。私（B）もずっとやりたいと思っていたし、他の障害児の母親の先輩からの話しで似たようなことをしている人も知っていたので、「通信を書いてみようか」と思って始めた。そこから輪が広がっていつている。

《周りの反応》

【B59】息子（b）が大きな声を出したり、走りまわったりしても誰も不思議と思わない。

【B60】息子（b）が少しずつ出来る事が増えていつていることを校区の人

は知ってくれているので、たまに学年の違う（障害のない児童の）保護者に「自分の子育て反省した」と話してもらえて嬉しかった。他人事ではなく、息子（b）の成長を共感してくれたり、見守ってくれたり、自分を見つめ直したりしてくれるのが嬉しい。

【B61】「障害とか関係ない」と言ってくれる人もいる。

《通信を配った気持ち》

【B62】通信を配っているから、小学校校区は、知ってもらっているので、参観日とかはすごく楽。

【B63】知ってもらうことはすごく大事。勇気はあるけど。

【B64】障害を持っている本人もその家族も視野も行動範囲も広がる。

【B65】なにより楽。ストレスが全然違う。

【B66】通信を書いたり、人前で話したりする機会を年に何回かもらえるようになって、言えることは、「知ってもらうこと」。

## 2)学校や教員が必要な理解

【B67】今はすべて叶っていると思う。ほんとによくしてもらっている（教員に）と感じる。

【B68】小学校1年から毎日、担任が職員会議ですべての職員にbが言った一言などを添えた通信を配っている。私（B）が、オープンになったから相手も応えてくれるという快感を味わったので、保育士も学校の先生も啓発して伝えていくことで協力してもらえ、自分の頑張りも認められる。「自分はこれでいい」とい安心感を私（B）も支援級の先生も味わっていると感じる。

【B69】去年と今年、支援級の先生は違う人が担任だが、学校から少し孤立してしまいがちである。そんな中、通信を配ったり、話したりするうちに、みんなが関心をもってくれる。だから、今は、学校全体で見て

くれていると感じる。

【B70】廊下ですれ違うたびに声をかけてくれる

【B71】先生の空き時間に息子（b）を見てくれる。

【B72】気が付いたことを担任の先生に伝えてくれる。

【B73】小学校も保育園も全くない。

【B74】私（B）のアプローチも積極的に行うこともあるが、理解のある先生がたくさんいるから、相互作用している。

【B75】バランスが大事。要望が取らなかったこともあるけど、保育園も小学校もこちらの様子を聞いてくれるし、私（B）も先生の様子がわかり、無理のないようお願いしている。この辺のバランスが出来ている。

【B76】（教員と障害のある児童の保護者との距離が近かったら、ストレスは、）減ると思う。（障害のない児童の）保護者や教師に言われて傷ついたことが、ほとんどない。それは、距離が近かったから。そこさえできたらあとは、なんにもいない。連携ができれば、その子に必要な支援とか見えてくる。

【B77】自閉症の子は、相手の気持ちを読み取ることは、苦手だと思われるが、実はそうではない。こちらから歩みよると、どんどんして欲しいことを言ってきてくれる。そこを先生にも感じ取って欲しい。

【B78】「知ること、知ろうとすることがすべて」そのことに気が付いて欲しい。専門知識が豊富でも知りたいという気持ちがなかったら、正直言って支援はできないと思う。

### 3)障害のない児童の保護者について Bさんが思っていること

【B79】同じお母さんでも人それぞれで、障害児の全ての親が共感してくれるわけでもない。親でもそうなのに他の人は、本当に難しいと思う。伝えることは、伝えるが、あとは、受け取った側がどう思うか？なので

強要はできない。しかし、同じ立場のお母さんが通信を読んで、共感してくれる事は嬉しい。

【B79】（希望が）なにもない。

【B80】保育園からの流れもあるが、支援学級が新設されたことや在籍していることに対して違和感が全くない。

【B81】障害のない児童の保護者が、息子（b）が特別扱いされているとか誰も思わないと思う。それは、我が家が障害をオープンにして、啓発しているからだと思う。啓発していなかったら、ここまでの理解はされていないと思う。周りに公表することで、周りに知ってもらえ、ストレスもなく過ごしている。

【B82】参観日に息子（b）が支援学級で一人で勉強していたら、廊下から声をかけてくれたり、覗いてくれたりした。

【B83】話を聞いて欲しいとは思う。出来る限り多くの人に、「障害ってなに？自閉症ってなに？」って全く知らない人を出来るだけ少なくしたい。一度でもいいから、障害がある子がいるっていうことを耳にして欲しいっていうのはすごく思う。生きにくさもあるが、可愛いところ、素敵な所があることに気が付いてほしい。

#### 4)社会に対して思うこと

【B84】実際身近に障害者がいない人に共感してもらえたら嬉しい。

【B85】この社会で生きていこうと思ったら、理解されないことの方が多いと思う。

【B86】校区から一歩外に出たら、周りの支援が違う。

【B87】全ての人に分かってもらおうとは、難しいので思っていない。しかし、私（B）が話をすることで、一人でも、「そうだったのか」と分かってくれる人が増えたら嬉しいとは思う。

【B88】同じ立場で考えてくれる人がいることも嬉しい。

【B89】障害児と触れ合った時に感じた時の素直な気持ちを周りにアピールして欲しい。そうすれば、理解してくれる人は増えてくると思う。

【B90】大きくなってきたのもあるが、走っていたり、独り言を言ったりするので、結構視線は気になる。叱られたこともある。悲しいけれど、それが今の世の中であって、その中で、息子（b）は生きていかななくてはならない。世の中が冷たいからと言って、息子（b）を家に閉じ込めていたら、息子（b）の人生の楽しみを半減させてしまうことになるし、隠れる必要もないと感じている。

#### 4. 障害理解に関する方法と内容

##### 1)学校や教員に対して求めている方法と内容

【B91】連携を薦めたい。しかし、母親のタイプによっては、そこまで出来ないって人もいる。私（B）の家はラッキーだと思う。連携の環境がしっかりしていれば、（障害のある児童の）親も先生も子ども（障害児本人）も楽になると思う。

【B92】（障害のある児童の）親が出来なかったら、先生が子どものいいところを見付ける。

【B93】「一緒に一歩踏み出そう」を発信することが私（B）にできることだと思っている。

【B94】障害で困っていることも、長所と短所。それは、誰にでも当てはまること。だから、「自閉症は、これが苦手で困っている。」をアピールするのではなく、「こんな生きにくさもあるが、工夫して頑張っている。でもその生きにくさが、こんな所で生きる」と話すように心掛けている。

【B95】偏見をなくしてほしい。「大変だね」と言われることを大変じゃな

く見てもらいたい、そんな啓発を続けていきたい。

【B96】障害児本人の出来る力もあるが、私（B）の気持ちや周りの環境で変わる。親にしか分からないこと、先生にしか分からないことがたくさんある。だから、専門的な知識や情報を集めて、その支援方法が子どもに当てはまるかを見極めるのが親や先生、身近な人の役目だと思う。

【B97】連携が必要。知ろうとする気持ちをもつことをこれから大切にしたい。それがあれば、障害児本人から来てくれる。親もたくさん話してくれると思う。私（B）が先生に願いたいのはそこ。「知る気持ちがあれば、全て上手くいくと思う。」

## 2)学校と障害のない児童の保護者両方に対して求めている方法と内容

【B98】知ってもらふことを続けていることが一番大きいかもしれない。

【B99】このありがたい環境を作っているのは、親（B）が動いているからかもしれない。それだけ専門家が近くに居ても、（障害のある児童の）親が動けないと学校は動けないと思う。実際に心理士が、「支援したいと思っていても、親が言わなかったら、先に進めないのも、もどかしいことがある」と言っていた。

## 3)同じ障害児の保護者に伝えたいこと

【B100】私（B）のように家でカード支援をしたり、通信を書いたりしたらいいと思わない。それは、私（B）が、興味があって、通信を書くきっかけがあったから。夫の理解不足の家庭もたくさんあるし、忙しくて支援ができない家庭もある。だから、ここまでの啓発を（通信や講演会など）みんなにして欲しいとは思わない。ただ、自分の家族、身近な人、友達に「自分の子はこうゆう子」っていう一言を一步踏み出して欲しい。それができたら幅は広がると思う。自分で発信できなかったら、悩んでいることを先生に言ったら、叶わずどこかに繋げてもらえる。あ

と、自分の子どもの事を知ってほしい。

【B101】親が我が子の障害を人に言いたくないのは、正直残念に思う。しかし、どうしようもない。障害を開示することがオープンな親だったら、学校は積極的に動いて欲しいと思う。私（B）が、学校の先生に話す機会があるのなら、それを伝える。

【B102】障害が目に見えないからこそ、伝えていかないといけないと思う。障害児のお母さんに「黙っていて、自分勝手な子、我慢できない子、って思われるのは悔しくないか？」と言ったことはある。



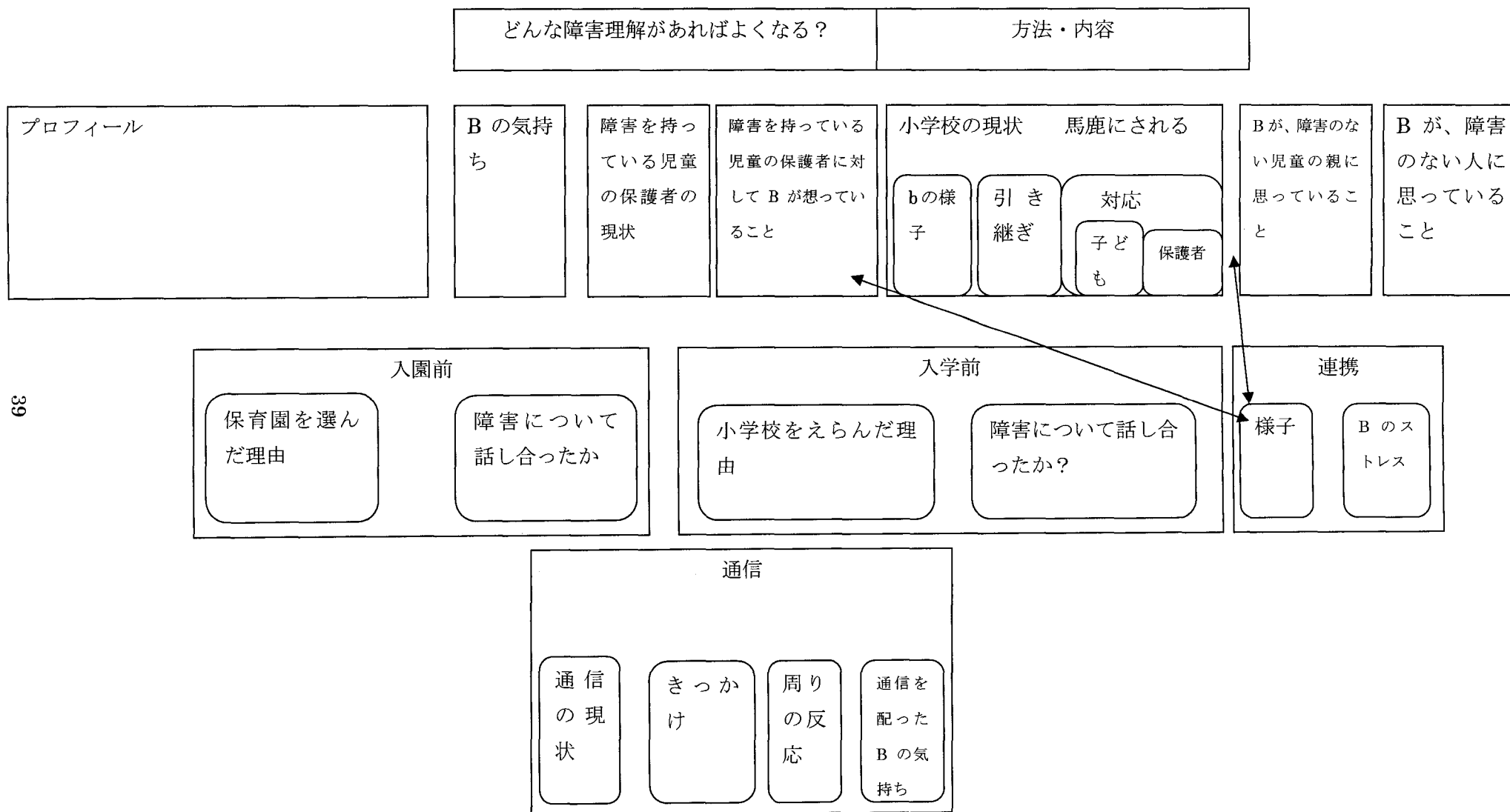


図 3-2 B さんのインタビュー結果について KJ 法を参考にした図

### 第 3 節 事例（C さん）

#### 1. 障害を知った時から、現在に至るまでの心の変化

【C01】高校 2 年生と高校 1 年生に姉（共に障害のない生徒、c の姉）がおり、どちらも楽しそうに高校に通っているのも、娘（c）も制服を着て、高校に通いたいと思っている。

【C02】障害は、2 歳の頃に分かった。

【C03】私（C）は、「自分の娘の事を理解してもらって、前に進ませたいタイプ」。

【C04】小学校 1 年生の 1 学期、先生に「計算ができない」と言われ、全員一斉に同じ授業を受けるのではなく、個人別学習法のある塾に通わせた。その時、（c）なりの計算方法が出来るようになった。これにより、人より、できるかと言われれば、分からないが、娘（c）は、計算は得意だと思っている。

【C05】娘（c）に教えてもらったのは、クリーンな心を持っていることと、一生懸命なひたむきさ。私たちの世界って駆け引きとかが多いが、こんなにクリーンな心で生きている子もいるんだと近くですごく勉強させられる。

【C06】健常児として生まれてきたら、できるはずなのに、障害があってもできないこともある。しかし、障害があってもここまで、結果を出すことができるのに・・・というジレンマは私（C）も娘（c）もある。

【C07】素直に心から「ありがとう」、「すみません」をいう素直さがすごい。自閉症の子は、障害のために思ったことをそのまま口にしてしまうが、障害を理解していない人にとっては、「言いたいことを言う子」となる。しかし、成長するに従って、言わなくなり、「そんなこと言ったら可愛そう」と発言したりする。心も、スピードが違うだけなので、時がたてば、いろいろ成長していると思う。

【C08】娘（c）に教えてもらったことはたくさんある。「お母さん」っていう言葉も聞けないと思っていたから、当たり前のことでも、一つ一つの成長が嬉しい。

## 2. 学校との話し合い

### 1)通常学校を選んだ理由

#### <小学校>

【C09】小学校は、支援学級に入らず、みんなと肩を並べて歩みたいっていう娘（c）の気持ちを私（C）も娘（c）の気持ちを大切にしていたかったので、勉強も遅れがちになるとわかっていたが、通常学級に在籍することを押し通した。

【C10】私（C）が、通常学校に進学させたいと思った。入学を決める時に、特別支援学校などを見学に行ったが、「刺激があるほうがいい」と思い、通常学校への進学を決めた。

【C11】初め、私（C）は、娘（c）を支援学級に進学させることを希望していたが、校長に「みんなスタートは同じにしよう」と言われ、通常学級に在籍することになった。しかし、支援学級に入れてしまえば・・・と思っている。

#### <中学校>

【C12】いろいろ葛藤はあったが、支援学級に進学した。

#### <将来について>

【C13】遅れていたけど、一生懸命勉強していた。娘（c）の高校に行きたいという気持ちが強い。「まあ叶わないと思う」。私（C）としては、高等学校は、色々なタイプがあるので、行けないこともないが、最終目標は就労なので、「その高校に行ったら、就労できるのか」って考える。それなら、

特別支援学校の高等部に 3 年間通って、基礎的な知識を詰め込んで、就職する方が、娘（c）にとってはいいのではないかとも思っている。でも娘（c）は、姉 2 人が高校に通っているのを見て、娘（c）も高校に行きたいという気持ちが強い。

【C14】障害があろうとなかろうと、仕事ができる、できないで、厳しい目で見られる。お金を頂いているのは、それだけ厳しいことなので、それに対応できる術を持っていないといけない。人よりは、支援してもらわなくては、いけないので・・・。今から、娘（c）の意識を高校から、特別支援学校など就労の方へ向くように変えようかなって思っている。特別支援学校の高等部でもいいけど、娘（c）は、上を目指しているの、そうしてあげたい。ジョブコーチとかあるが、田舎なので働く場があまりない。障害のある子がバイトをするなどの経験をさせてあげたいが、田舎なので、ない。

【C15】高校に行くの、がいいのか、特別支援学校に行って、100%に近いような就職を取るのか、娘（c）の人生にとっては、どちらがいいのか悩んでいる。定時制や通信などいろんな方法はあるが、娘（c）が、行けるように考えてあげないといけない。そのために、基礎力と生活力を身につけさせたい。大事な時間は過ぎてしまう。みんな受験体制に入るの、今、詰め込むには一番大事な時期だと思っている。できたら、娘（c）が、前進できる所にやってあげたい。

【C16】言葉がでたら、次のことって親は期待してしまう。でも最近は、その子の持っている可能性もある代わりに、限界も知ってあげないと、追い込みそう。難しい勉強を詰め込んでしなくても、娘（c）にとって大切な勉強さえ身に付けば社会に出た時に通用するのではないかな。健常の子でも社会に出た時に、不安定になる子もたくさんいるから。

【C17】就職率が100%の特別支援学校もありますよね。派遣社員から入って、1~2年働いて、本社員にしてもらうのが多い。娘(c)は、一つのことをコツコツやるのは出来るので、就労しやすいとは、思っている。そうゆう所に就職できたらいいですけど。仕事が、遅い、早い、性格もあったりするが、真面目に休まず働くのは、確かなので、そうゆう所は、きっちりとしてやりたい。親(C)もいつまでも一緒に歩んであげれない。姉も、あまり捉われずに、自分の道を進んで行って欲しい。姉が娘(c)のサポートをしてくれる分には、それはそれでいいが。

## 2)入学前の話し合い

### <小学校>

【C18】小中学校共に支援級の先生。姉(cの姉)が通っていたので、相談をしていた。私(C)からも校長に働きかけて、「保育園の生活発表を見に来て欲しい」と言った。来てくれたが、一回では、その子どもはわからない。だから何回か見てもらえるようにと思い、早めから、アプローチしていた。時期は、夏休みくらいから。

【C19】担任が決まったら、連絡して欲しいと私(C)からお願いした。

### <中学校>

【C20】中学校は教えてくれなかった。中学校進学については、まず、小学校の特別支援学級の教員に相談し、中学校の特別支援学級の担任に連絡を取ってもらった。相談した内容は、娘(c)の最終目標は、就労である。そのためにどのような方法で勉強したらいいのか、常に考えて欲しいと伝えた。

## 3)入学後の話し合い

### <小学校>

【C21】通常学級に在籍していたので、障害のない児童の保護者と話す

機会があった。懇談会のたびに「娘（c）が障害を持っていて、迷惑をかけるかもしれないが、支援して欲しい。」と言っていたので、娘（c）の事を知っている人は多いと思う。

【C22】先生が娘（c）の障害を（障害のない）児童・生徒に伝えたのは、5、6年生からだと思う。

#### <中学校>

【C23】1年次の先生は、多くの特別支援学級の子どもの卒業させたベテランだったが、体調不良により、よく休む先生だったので、結局、支援内容はよくわからなかった。

【C24】現在は、大切な時期なので、支援学級の教員とは、常に気になることがあれば、聞く、計画帳で連絡を取るなどするようにしている。

【C25】障害のない児童の保護者と話す機会は、中学1年生の時には、PTA総会の時に保護者に伝えた。しかし、姉（cの姉）が、同じ中学校に通っており、受験生だったので、そちらの方に参加すると話す機会がないので、中学に入ってから、話す機会が減った。また、PTAの総会の時や保護者会でしか会えないのに、その時に、支援学級の先生だけが懇談会を開いたので、伝える機会がなかったこともある。

【C26】学校の弁論大会で、娘（c）が障害について発表したもので、少しは、わかってもらえたと思う。

### 3. 学校生活に必要な理解

#### 1) 学校の様子

##### (1) 学校の障害理解の様子

#### <小学校>

【C27】娘（c）の支援計画を作る時、小学校側から連絡はなかった。小

学校 4 年生の時の先生が、感情を前面に出してくる人だった。その先生と出会って、その先生との出会いで、娘(c)はチックになった。いつも「ある」って心配し、不安症になってしまった。その先生は、いつもと違い、「どうゆう風な支援が必要か」と声をかけてくれたから、安心してきっていたのに……。安心していたら、裏では全然支援されていなかった。

【C28】小学校では、下配の教員はついていない。ただし、小学 5 年生の時は、お願いして、算数だけとか下配の教員をつけてもらったり、学生チューターについてもらったりした。

【C29】小学校 1 年の先生は、あまり理解のないというか、わからない感じだった。最初の頃は、学級通信に“明日の予定”を書いてくれていた。それが、途中からなくなり、黒板に書くだけになった。すると、娘(c)はちゃんと板書できているのかわからないし、娘(c)も書き方がわからない。だから勉強している単元と持ち物を書いて欲しいと(担任に)言ったら、「時間がない」と言われた。娘(c)だけでなく、健常児にも良いことなのに……。単元を書いてもらえるだけで、親はサポートしやすい。板書もきちんと書いているか分からないので、友達に聞くしかないが、毎回となると、申し訳ない。ある一人のお母さんに娘(c)の障害の事を説明して、電話させてもらっていたけど……。その時「ウチができることだったら……」と言って頂いた。

【C30】友達にサポートしてもらっていた。声かけも多かった。

#### < 中学校 >

【C31】下配の先生は付いていない。

【C32】個別の支援計画について、学校側から連絡はない。私(C)から、要望し見せてもらった。

【C33】支援学級の担任は毎年変わっている。

【C34】中学校の通常学級の先生は、1,2年と同じ先生だったのだが、3者面談の時に娘（c）の様子を話したら「そうですか」で終わった。普段の様子のお話がなかったのも、「先生は見ていない」と感じた。中学校は、朝と帰りしか担任と会わないけど、担当教科や道徳の時間の様子でも教えて欲しかった。また、頑張っている姿とかの声かけも欲しかった。親（C）も話す気がなくなってしまう。支援級の先生は、友達関係など苦手な所など連絡を取っている。1日の反省やプログラムを学習計画帳に書いて、先生と私（C）と娘（c）がサインをする。やったことはできたっていう目に見える支援を始めたら、充実してきた。

【C35】ひとつひとつの積み重ねが大切なので、IQっていうくくりで言われると、娘（c）は低いけど、努力と継続を頑張れば、ある程度の所はできていると思っている。

【C36】娘（c）は、普通の子。高校に行きたい気持ちが強い。中学校から、支援学級在籍になったけど、1年生の頃は、ほとんど通常学級に行っていた。2年生になって、ようやく支援級に通うようになったけど、今まで、通常級で過ごしてきたから、支援級の勉強が納得いかなかったようだ。受け入れられない。だから、「自分（c）が、がむしゃらに勉強するしかない。」って思っていた。家でも、先生にも「他の子どもは、問題が分からなくても通常級にいらなくてはいけない。でも、あなたは、時間をかけて教えてもらえる。それを利用して頑張れ。」って話して、方向が変わってきている。それでも、上級（通学級）と授業の早さがちがう、と言っていたので「みんな行きたい学校があって、勉強している。cのあった学校に行くための勉強をもうしている。だから、決して、遅れているとか思わなくていいよ。」って伝えて、納得させるのに長い時間が、かかった。少しおかしくなっていた。

【C37】これをするためには、どうしたらいいかって分かっていないけど、



やろうとしている所がある。

【C38】部活や勉強、受験などで忙しくなり、友達（障害のない児童）も娘（c）のサポートは難しい。支援学級に居る時間が長ければ、長いほど、会話の機会が少なくなる。娘（c）は、通常学級と特別支援学級とどちらも通っているが、実際（障害のない）友達との関わりは、部活が多い。

【C39】支援学級に通っている時間があるので、（障害のない）友達の輪の中に入るのは難しい。それでも話しかけたりしてくれる。ただ、（cは）聞き取りも、話すことも苦手なので、会話にならないこともあるが、それを友達がどう捉えているかは分からない。しかし、娘（c）は、「学校に行きたくない」とは言わない。

【C40】音楽界の時にトライアングルを担当したが、できなかった。そこで先生に「合図をして欲しい。」っとお願いしたら、「私は、音楽が得意ではないので、出来ない」と言われた。「娘（c）は、家でも一生懸命練習している」っと伝えると、「じゃあもう、家で指導するのはやめて、お母さん（C）が教えて頂けますか？」って言われた。そこで「学校に居る時間の方が長いし、先生に教えて頂いているし、家では、みんながどのような音楽を、どれくらいのスピードで演奏しているのかわからないのに、家で練習できますか」って言ったら「録音してください」って言われた。だから、録音して家で練習させた。先生が放置の態度を取ったので、校長先生に「娘（c）が不安がっている」と説明した。「以前、みんなが給食を食べている時に、食べずにトライアングルの練習をみんなの前でさせられた。みせしめみたいだった。」とも伝えた。昼休みに、呼んで教えても良かったのではないかと感じる。

(2)Cさんが行った障害理解を進めるために実際に行ったこと

【C41】自分（C）の職場の人や友達に「ウチの子は自閉症」という診断を受けているので「光と共に・・・」の本を読んでもらったり、障害関係の本を学校や様々な所に持って行って、読んでもらった。また、小学校の学校の先生全員に（c）のことを理解してもらおうと、サポートブックを作成し、それを全教員に配った。サポートブックには、娘（c）の障害の特性や苦手な所、普通に見えるけど、理解していないので、確認をして欲しいことなどを書いた。それを小学1年生からずっと続けてきたが、理解してもらえたのは、小学校5,6年生の時ぐらいからである。

【C42】光とともに・・・という本を小さいうちから、出会う（障害のない児童の）お母さんに読んでもらった。それで「いや」とは言われぬ。それで、どれだけのサポートしてもらえるか？っていうのはあるが・・・。（cは、）「サポートが必要な子」というのは、わかってもらっている。「あの子なに、けったいな子」とはならない。

<cが行った障害理解を進めるために実際に行ったこと>

【C43】一人一人を捕まえて、「障害があると説明するのは難しいので、中学の文化祭で自分（c）の口から、障害について発表した。その文化祭の様子は、地域にケーブル放送を通して流れるので、発表させるか悩んだが、娘（c）が、人前で話す経験と思って、発表させた。一応、きちんと発表できたし、自分（c）の書いた文で発表できたからよかったと思っている。

【C44】全校生徒と全校生徒の親と文化祭に来ている高齢者のいる前で発表した。その内容は、病名は、偏見などを生むので、「私（c）は、障害を持っています」ということで、子ども病院をメインに書いた人権作文を発表した。その反応は、理解してくれる人もいるし、馬鹿にする人もいるみたいな感じだった。

## 2)学校や教員が必要な理解

### <学校全体>

【C45】障害のない児童の保護者が理解する機会があまりない。PTA 主催の講演会で障害者関係の講演は全くない。もっとしてもらえたらいいのと思う。

【C46】道徳や総合的な学習の時間で、老人ホームに行って、障害のある人、痴呆の人の勉強は行われているが・・・。

【C47】小中学校の教育の中で、上から目線で人と話すことや変な顔をすることがおかしいことだと確かに教わっているのか疑問である。障害は見えにくいけど、障害があるのはわかっているはず、わかっていなくても、先生や親のフォローがないと、生徒は成長しないと思う。勉強会など年に1回でも、全校生徒、(障害のない児童の)親も来ている中で行って欲しい。

### <小学校>

【C48】理解してくれる先生はいて、サポートもあったが、受け入れられない先生は、特別支援教育に対して、「時間がない」「僕らも大変だ」と言っている人もいる。大変だったら、他の先生に協力してもらおう努力をしてほしい。一人の力ではできない。小学校は、担任制なので「自分のクラスの子」というイメージが強い。

### <中学校>

【C49】中学校は、「支援級の子」という感覚が強い。教科ごとに先生は、変わるし、障害のタイプや勉強の進度も違う、目標としている進路も違うだからもっと、先生通しで、協力してほしい。

## 3)障害のない児童の保護者について C が思っていること

【C50】出来る子どものお母さん（障害のない児童の保護者）は、「自分の子は出来る」と上から目線で話す。

【C51】自分の子が障害がないと理解はあんまりないと感じる。自ら理解しよう、分かろうとすることは、あまりない。

【C52】分かっている人は「そうなんだ」。わからないなりに理解しようとしてくれる人もいる。だけどほとんどが、「大変だね」で終わる。この言葉には、この応えっていう感じで、「どうしたらいい？」っていうことより「そうなんだ」って終わる。人の子より、自分の子って感じです。

#### 4)社会に対して思うこと

【C53】障害に関する職業の方は、私（C）や娘（c）の話に耳を傾けてくれ、色んな相談にものってくれる人もいるが、自分の周りに障害者がいない人は、あえて勉強しなくても、世の中は通っていくので、興味がないことがある。

【C54】肢体不自由など見た目でわかる障害ではなく、ボーダーラインなので非常に認められにくい。人っていうのは、遅れている子のことをアホだということでまとめてしまう。障害を持っていて、こうゆう所が苦手なんだっていうことを認めるよりも、だから？っていうような見方になり上から目線になる。

### 4. 障害理解に関する方法と内容

#### 1)学校や教員に対して求めている方法と内容

【C55】勉強や将来を考える時に重要な所を効率よく教えて欲しい。板書をノートに写すだけっていう授業なのでいまいちポイントがわからない。娘（c）もみんな（通常学級に在籍している障害のない生徒）と遅れている、授業数が少ないと焦ってしまっている。もっとポイントを押さえて教えて欲しい。言葉のフォローもないので、娘（c）は勉強するしかないと思っているが、基礎知識がないので、難しい問題は、自分では解

けない。もう、中学 2 年生 (c) なので、親 (C) として、進路が心配だが、どうしたらいいのかわからない。

【C56】まず、生徒理解。道德の勉強の中で、いじめられている子とか、障害を持っている子とか、そういう色々なターゲットを挙げて、みんなで、話し合う必要があると思う。(障害のない児童の) 保護者の人もだけど、(障害のない) 子どもも必要だと思う。障害は、同じ自閉症でもタイプが違うので、一人一人にあった支援が必要だから、知ってもらう必要があるが、(障害のある児童の) 親が了承しないと出来ない。個人を理解することは、「健常の子どもも成長する」ってことを言わなくてはいけない。(障害のない児童の) 保護者にも、アンケートを取って欲しい。内容は、PTA で講演会をした場合、どれくらい参加するのか、自分の子どもに障害がなくても、どうゆう意識でいるのか、自分と(障害児・者が) 関わりを持った時にどのように接しようと思っているのか、である。それを基に、機会を作り、小・中学校の義務教育の時の心の成長には、周りや身近で困っている人に対しての手の差し伸べ方を学ぶべきだ。支えあいをすることによって、相手に頼る術も身に付くので、健常児にとっても大きなプラスになると考える。先生のやり方一つで、「わかるでしょ？」っていう観念を捨ててもらいたい。健常児でも、苦手教科がある。そういう子を取り出して、支援学級の子と一緒に教えられる環境があれば、交流が持てるし、支援級の子どもも特別じゃないと思える。健常児も支援級の子どもも同じ所でつまづいている可能性もあるのではないかと思う。それがわかるだけでも違うと思う。健常児は、わかったら、そのクラスから出てもいいような勉強を教えてもらいたい。

【C57】親からの話なので、一概には言えないが、みんなが帰った後に、残って練習している、気持ちがある人を出来ないから、コンクールに近い

からって減らします。っていうやり方がいいのか、ある学校の先生は、障害児が分かりやすいように、その子用の大きな楽譜を作って、簡単にふけるように工夫している人もいます。それで、健常の保護者から、(意見を)言われることもあるみたいだが、努力はすごい。その気持ちだけで、頑張る子は頑張るし、ちょっとしたフォローがあれば、伸びる。減らすなら減らすなりのフォローが必要である。「障害があるから、仕方がない」って言うてなにもしないのは簡単だ。そうゆう所が、理解されていないと感じる。出来ないことに対して、(障害のない児童の)親も子(障害のない児童)も上から目線になるのではなくて、心の中で思っている、前面に出す必要はないと思う。それを我慢する勉強とか、先生のフォローの持って行き方とか必要だと思う。(障害のある児童の)親も子どもに一生懸命サポートしようと思っている。そうゆう親はたくさんいるので、先生は、全部聞くのは大変だと思う。先生は、多くの子どもを見たうえで、支援するので、(障害のある児童の)親もそれを理解しなくてはいけない。しかし、足りない分を家でもフォローしてあげなくてはいけない。子ども、親、先生、地域、支援級の先生だけではなくて、他の先生も理解してほしい。声かけとか。

【C58】一人でも生活できるようにしてあげたい。その為に、大切なことを学年や学校生活で必要な時にポイントを押さえてやっていけたらいいと思う。親も手探り状態で進むので、先生も理解があって、アドバイスをくれたら、励みにもなるので、いいかなと思う。

【C59】現在、吹奏楽部でパーカッションをしているのだが、娘(c)の方が先輩なのに、仕方がないことだが、「覚えが悪い」「遅れ気味」で、パートを減らされている。減らせられるのもいいが、そのパートを(障害のない児童)1年生にさせる。健常者にも先輩より上手い子はたくさんいるので、よくある話だが、その後のフォローをして欲しい。フォローがないの

で、「先輩は、そんなこともできない」と上から目線でものを言われたり、変な顔をされたりする。「そういうことをするのがおかしい」というのが分からないのだろうか？

【C60】支援学級があるのは分かっていると思う。しかし、学年が違えば誰が行っているかはわからないと思う。例えば、障害理解がある学校だったら、学校のサポートがすごい。親が子どもの障害を受け入れていなくても、介助員をつけたり、特別支援学校のコーディネーターに質問したりして、親の知らない所でのサポートがすごい。しかし、娘（c）が行っている学校は、して欲しいことは言うが、サポートはない。親も理解して、子どももやる気で、学校から支援してもらったら、すごく伸びると思う。

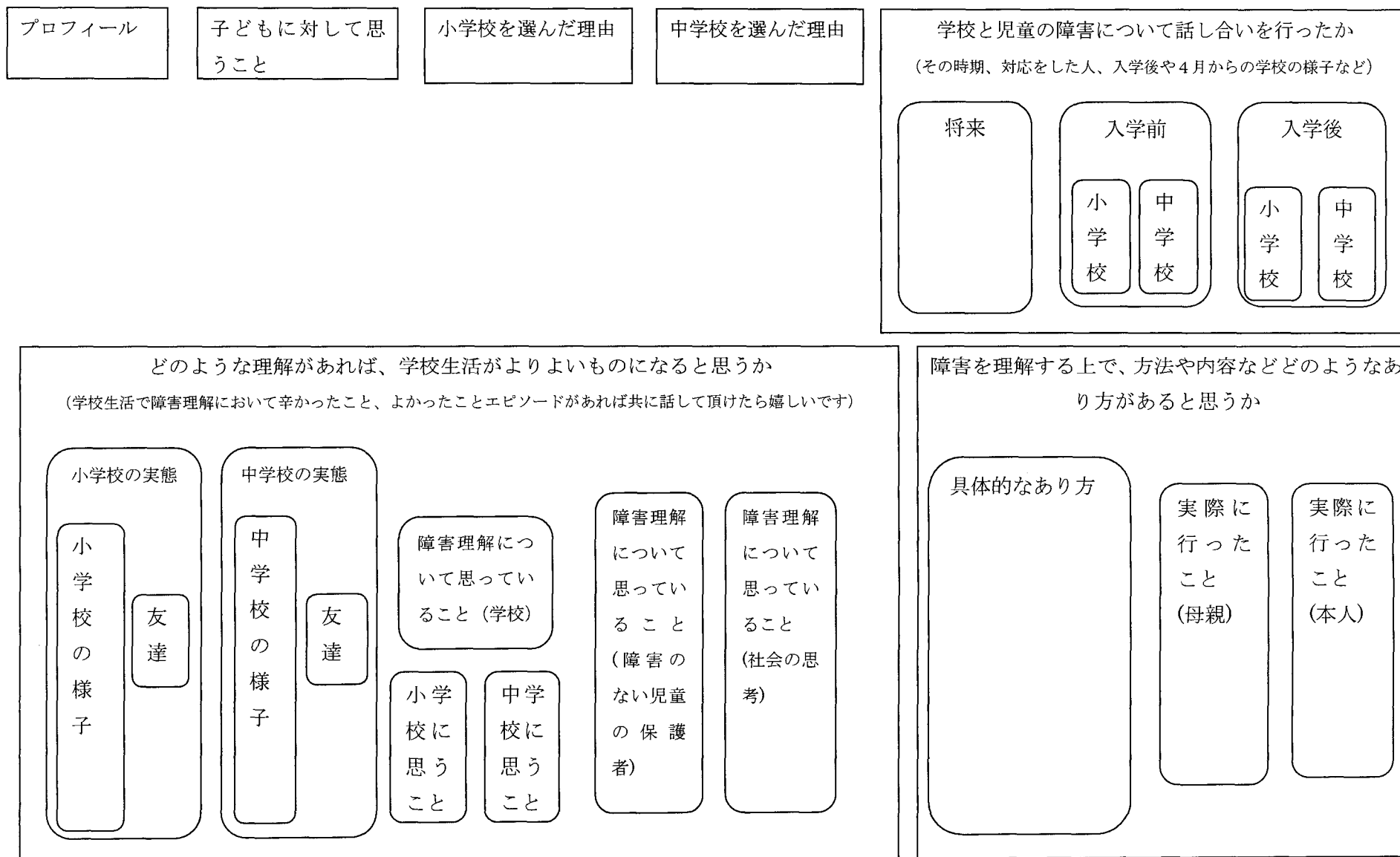


図 3-3 C のインタビュー結果について KJ 法を参考にした図



## 第4節 事例（Dさん）

### 1. 障害を知った時から、現在に至るまでの心の変化

【D01】今は、自閉症の事は、知られてきており、診断も早い。一歳半から、支援してくれる。息子（d）は、3歳だった。「まだ、待ってこう」と言われた。そして、保育園に上がる3歳の時に、「自閉症」って診断された。

【D02】「ありがとう」も言うけど息子（d）は、暴言もはくけどね。嘘をついたとしても、きちんと裏がある。

【D03】当たり前と思っていたことが、すごいと思っている。

【D04】視覚から出来る事は、健常者より優れていると考えている。

【D05】言葉でのコミュニケーションは苦手である。しかし、私（D）は、一番そこができたらいと思っている。しかし、これ以上伸びないと考えている。

【D06】色んな（障害のある児童）保護者の話を聞いて、講演会にたくさん参加した。

【D07】地域の人と触れ合う機会があった。近所の人に分かってもらわなくてはいけないという想いがあり、伝えていた。それは、人の家に勝手に入ってしまうから。

【D08】いろんなタイプの親がいるが、（Dは）障害を受け入れにくいことはなかった。認めるのは早かった。しかし、泣いている保護者に出会ったと「なぜうちの子が」と確かに思うが、そこまでない。自分でも少しおかしいのかな？と思う。

### 2. 学校との話し合い

#### 1) 通常学校を選んだ理由

< 通常小学校を選んだ理由 >

【D09】（専門家に）通常学校でも大丈夫と言われたこと。

【D10】障害のない子どもと触れ合う機会が、義務教育しかない。

<通常中学校を選んだ理由>

【D11】迷ったが、小学校が楽しかった。

【D12】家から近いので、息子（d）が行く気だった。

<特別支援学校の高等部を選んだ理由>

【D13】学力の問題。

<将来について>

【D14】小学校 6 年間は、長かったけど、安心だった。中学に入学した際、将来のこととか不安になった。

【D15】障害児の保護者が子どもに虐待する話もあるが、逆に障害児が人を殺すこともある。その度に「自分の子どもだったらどうしよう」と息子（d）が成長するたびに思う。

## 2)入学前の話し合い

<小学校>

【D16】教育委員会が介助員を付けることに理解を示さなかった。そこで、入学予定の校長、幼稚園の園長が教育委員会に向けて介助員の必要性を訴えてくれた。

【D17】環境に恵まれていた

【D18】動き出した時期は、幼稚園の秋。入学前に教室見学を申し込んだら、（学校は）「もちろんさせてもらいます」と言った。

【D19】2つ下の妹（障害のない児童、dの妹）が、小学校4年の時、「お兄ちゃんがすることが恥ずかしい」と言った。真っ先に担任に連絡し、全職員で職員会議をしてくれ、報告だけでなく、今後の対応策も考えてくれた。学校のすべての教員が情報を共有しており、学年間にとどまら

ず、声をかけてくれるので、学校全体で、息子（d）の成長をほめてくれる。

#### < 中学校 >

【D20】介助員は無理と言われた。

##### 3)入学後の話し合い

#### < 引き継ぎ >

【D21】PTAの引き継ぎもしっかりしていたと思う。

【D22】個人的の引き継ぎのも大丈夫だった。担任が、1～4年まで一緒だったのもあるが、担任が変わっても、特別支援学校の免許を取るくらい勉強熱心だった。

### 3. 学校生活に必要な理解

#### 1)学校の様子

##### (1)学校の障害理解の様子

#### < 保育園 & 幼稚園 >

【D23】入園前から通っていた療育に保育園の教員も一緒に行ってくれた。

【D24】言葉も出ない状況だったが、集団に入るとすごく成長した。

【D25】（dは）友達の真似をして、トイレを覚えた。

【D26】介助員をスムーズに付けてくれた。

【D27】運動会や文化祭などケーブルで流れる。

#### < 小学校 >

【D28】算数と国語は支援学級で過ごし、介助員もいたので、ほとんど、通常学級で過ごした。

【D29】人数が多くない学校だったので、支援があった。

【D30】カウンセリングの先生に「学校の環境に恵まれている」と言われた。

【D31】学校に対しての不満は全くない。

【D32】自分（D）から、学校に案を提出することもあるが、その一つ上のアドバイスをくれる。

【D33】幼稚園の介助員が3年生まで付いてくれた。しかし、違う人とも出会うことで、息子（d）の成長につながるということで、変わった。新しい介助員もいい人だった。

【D34】知的障害のクラスと情緒障害のクラスがもともとあった。しかし、2つ上の自閉症児の保護者が我が子の障害を認めておらず、教員がやりにくそうだった。しかし、息子（d）が入学し、安心したのか、障害を認めるようになった。

【D35】「保護者の理解がないと教員が支援できない」という場合もある。

【D36】親の理解と親の協力があって子は伸びる。

【D37】介助員に生活の世話だけでなく、勉強の仕方、視覚での支援をしてもらった。

【D38】私（D）は、学校にまかせっきりだった。

【D39】親自身も勉強まで余裕がない。

【D40】発表会の行事の際、みんなと同じことができるか心配だったが、（障害のない）友達が協力してくれてできた。

【D41】特別支援学級は、学校全体に受け入れられていたと思う。休み時間に、通常学級の子が遊びにきて、一緒に遊んでいた。

【D42】教員が、専門家に教育方針の相談をしに、一緒に療育に来てくれた。

【D43】学校で基礎の基礎を教えてもらったと感じている。

【D44】静かにする時は、静かにすることができるようになった。

【D45】小学校時の自然学校で、教員が事前に写真を取ってくれて、視覚的に支援してくれたので、文句のつけようがない。

【D46】ほんとに可愛がってもらっている。

【D47】息子（d）の学校は、すごく理解があり、苦手な音楽がかかると耳をふさいでしまう。そんな時、みんなが楽しくなければいけないと体育祭の音楽を変えてくれたり、給食時のボリュームを（障害のない）児童自ら下げてくれたりした。

#### <中学校>

【D48】支援学級はもともとあった。

【D49】教員が慣れていなかった。教員も不安だったと思う。

【D50】不満はあったが、教員の一生懸命な気持ちが伝わったので、「楽しく過ごせばいい」と思った。

#### <特別支援学校高等部>

【D51】結構大変。それは、社会で働くための作業はできるが、挨拶や日常生活ができるようにならないといけないので、当たり前のことを今から学ぶから。

#### (2)学校の障害理解教育について

【D52】先生が積極的だった。小学校1年の時に、学校から「児童に障害について話して欲しい」と言われ、1,2,3年 4,5,6年に分けて、「自閉症」について紙芝居で話した。

【D53】同じ学年の子は、教員が話していたので、ある程度知っていた。

【D54】教員の理解があり、困った経験は、あまりない。

【D55】（障害のある児童の）親が一生懸命言って、それが学校に伝わらなかったら、ショック。そんな学校は実在しているのか。

<学校が実際にやったこと>

【D56】年に一回 PTA の役員が、参観日後に、自閉症についての講演会を行った。

【D57】PTA が中心となり、発達障害について、冊子を配った。

【D58】「こんなことができる」という子どもの良いところを書いた通信を配布したり、講演会も年に一回開催したり、友達集会といって相手の良いところを伝える場が設けられていたり、なにより教員が（障害のある）子どもの良いところを伝えようとする所があった。友達集会では、学年が違うと、障害児がいることを知らないことがある。（障害のある）子どもの事を知らない人の事を考え、差別やいじめがないようにしているとされる。

(3)D が行った障害理解を進めるために実際に行ったこと

【D59】（障害を開示した結果）生きやすくなった。理解してくれているので、目立った行動をしてもわかってきているという安心感がある。

【D60】「障害があるのに、こんなこともできる」と誉めてもらえるので、嬉しい。

<障害を開示した結果が、障害のない子どもに影響した例>

【D61】保育園や幼稚園と小学校が一緒に行事を行っていたので、息子（d）の障害について、知ってくれている人が多かった。それも、息子（d）の障害について理解している人が、理解していない人に話してくれることで、障害理解が広がって行った。

【D62】息子（d）が幼稚園の時、小学校のお兄さんやお姉さん（共に障害のない児童）が幼稚園に連れて行ってくれていた。

【D63】小学校は、登下校一緒に学校に通っていた。その時に、（障害のない同級生の）子どもから、様々な情報が入るようになった。「なんで、

一緒に学校に行くの？」と質問された時に、分かりやすく説明することができ、(障害のない児童から)「こんなこともできていたよ」と話してくれるようになった。

＜障害を開示した結果が、障害のない児童の保護者に影響した例＞

【D64】聞いてもらえる体制ができた。

【D65】障害のない子どもが家庭で学校の様子を話した時に、その保護者伝いに様子を聞きくことができた。内容は、いいことも悪いことも両方教えてくれる。教員が知らない情報がたくさんあり、フォローができた。

【D66】誉めてくれる。

＜障害を開示した結果が、地域に影響した例＞

【D67】地域の人に分かってほしいと思っている。

【D68】(dは)お気に入りのコンビニに学校帰りによりることがあり、店員に障害のことを話し、連絡先を教え、来たら連絡をしてもらうようお願いした。未だに、連絡先と名前を覚えてくれている。

【D69】塾に時間をずらして入れてもらえた。一対一の授業をしてもらえた。

## 2)学校や教員が必要な理解

＜小学校＞

【D70】障害理解教育が進んでいたのもので、要望はない。

＜中学校＞

【D71】介助員を最低クラスに一人つけるなど、障害のない生徒と共に学ぶ機会を望んでいた。

## 3)障害のない児童の保護者について D が思っていること

【D72】知る機会がない。

【D73】（障害のない）子どもが家に帰って、学校の様子を親に話した時に、「乱暴な子」「わがまま」と捉えられてしまう可能性もある。その経験はある。

【D74】「なぜ？」と聞かれることがあるので、理解できない人もいる。特に買いものに行った時に冷たい目線を感じる。しかし、それは当たり前のことである。いいことばかりではない。

【D75】「興味がないなら、なくていい」と思ってしまった部分もある。しかし、大多数の人が障害について理解を示してくれているので、理解度の低い人が少人数だったら、啓発しやすい。結局は、人の口を通して、啓発に繋がる。

#### 4. 障害理解に関する方法と内容

##### 1) 学校や教員に対して求めている方法と内容

【D76】我が子の障害について気が付いてない保護者に対して、周囲の人が何か気が付いたら、言いやすいような環境をつくること

【D77】通常学校に進学を希望する、障害児はたくさんいるので、最低でも、一クラスに一人は介助員がいるようにする。これだけでだいぶ違うが、予算的な問題もあると思う。

【D78】障害児の保護者が悩みなどを言える環境をつくること

##### 2) 障害のない児童の保護者に対して求めている方法と内容

【D79】知る機会は大切だと思うが、機会があっても、参加してくれなければ意味がない。興味のない人が、知る機会に参加してくれるかが問題である。

【D80】障害児の保護者が伝えていくことが大切。周囲に頼らなければいけないが、まず、（障害のある児童の）保護者が動かないと周りは動い



てくれない。その想いは伝わる。

【D81】 良いことも悪いことも伝えるべきだ。

### 3)同じ障害児の保護者に伝えたいこと

【D82】 我が子と一緒にいる子（障害のない児童）の保護者に、障害について話していく必要があると言っている。

【D83】 家の中に居たら安心という思う時期は確かにあったが、いずれ社会に出らなければいけないので外に出て、地域に伝えていくべきである。

【D84】 ストレスがたまるのは当たり前、だから、人に話すことは大切。言える場所がないのは悲しい。

【D85】 周りにいる障害児の保護者の話を聞いて、障害の事を伝えていく必要があると思った。

【D86】 通常学校は、一人でこもりたいタイプの自閉症の子が行ったら、自分のペースが守れないかもしれない。それだったら、将来を考えた勉強をした方がいい。

【D87】 悩んでいる（障害のある児童の）保護者の情報があれば、親の会に誘ったり、話しを聞いたりしている。

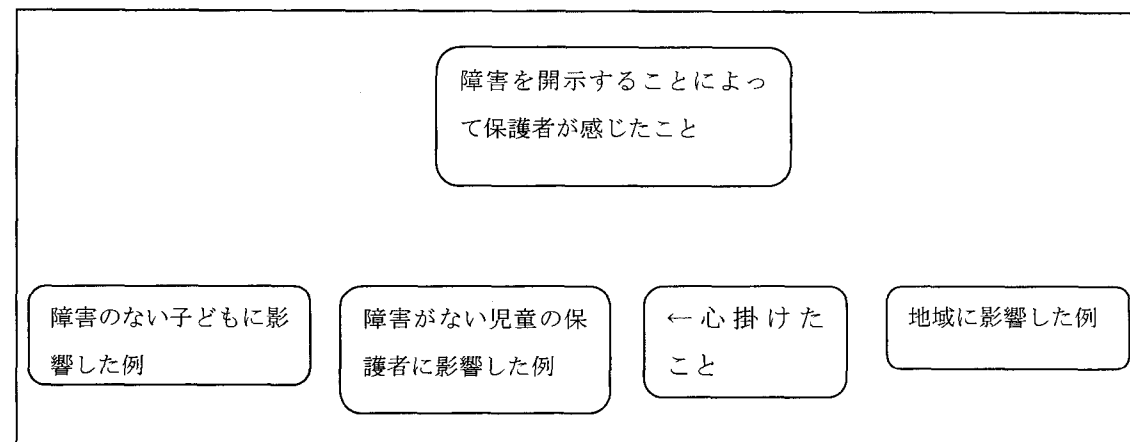
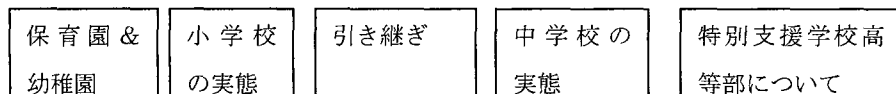
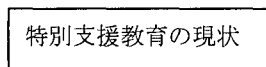
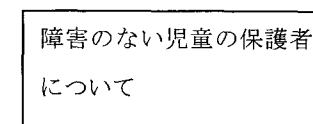
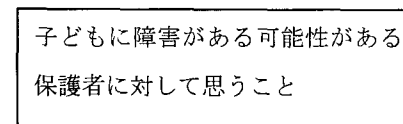
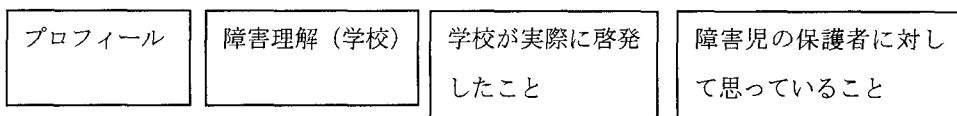
【D88】 障害について知ってもらえていると安心が生まれる。（障害のある児童の）保護者だって傷付きたくない。

### <障害の疑いがある児童の保護者に対して>

【D89】 早めの療育は肝心である。

【D90】 学校の教員が児童の障害を見付けた場合、言いにくいので、障害児の保護者が、伝えることも大事だと思う。

【D91】 親と親の繋がりは大変である。



64

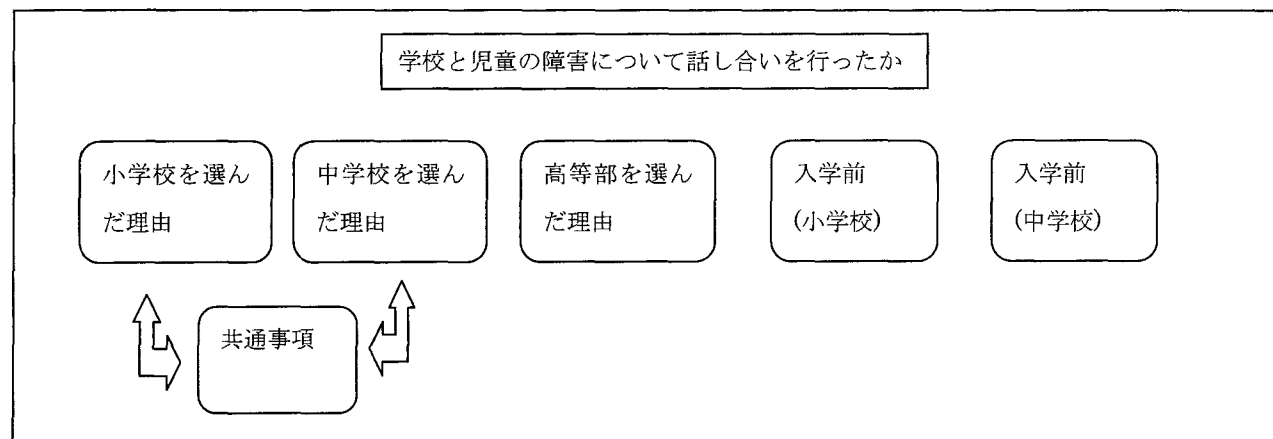
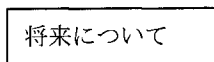
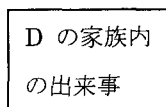
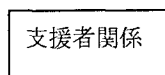
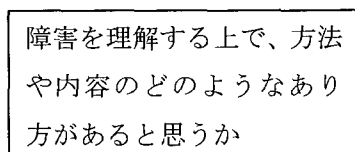
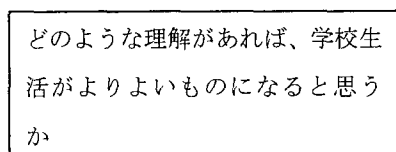


図 3-4 D さんのインタビュー結果について KJ 法を参考にした図

## 第 4 章 考察

### 第 1 節 障害を知った時から、現在に至るまでの心の変化

まず、1 点目は、発達障害児の保護者は、我が子の障害をある程度受け止め、生活空間をさらによくするための要望や将来について考えられるようになった背景には、心の支えとなる人物の存在が大きく関わっていることがわかる【A02・A05,B01,B03,B07・B09,C05,C07・C08】。また、インタビュー終了後に、D さんが、「夫がいてくれたのがよかった。」と発言した。つまり、今回インタビューを行った発達障害児の保護者全員が、心の支えとなった人物を挙げている。これは、特に B さんの発言から、悩みや不安を聞いてくれる人の存在、悩みや不安など辛いことを解決に導けるような人の存在は、我が子の障害受容や自分自身の心の持ちように関係することが感じられる【B03】。

山田(2008)の、発達障害児の保護者が親の会に入会した目的を調べた調査では、第 1 位に情報の入手、第二位に同じ悩みをもつ人との交流、第三位に発達障害児の活動の場への参加を明らかにしている。その結果、「入会によって、発達障害児の保護者は、障害の理解が深まると共に、我が子の理解ができるようになり、対応が望ましい方向に変わってきていること、進路選択、就労準備についても見学会や先輩の話が役に立ったことを挙げている。」このことから、同じ悩みを持った人との関わりで大きく心境が変わることがわかる。また、柘植・井上(2007)は、家族の問題のうち、発達障害児の保護者のストレスの要因となるのは、我が子の障害に対する夫婦の認識の違いであることを挙げ、この問題に夫婦それぞれの親戚の意見や感情が影響すると、事態はより深刻化し、夫婦の不和や離婚の原因になると述べている。つまり、夫婦の認識の違いは、

相互サポートに大きく関わり、認識のズレが少ない関係は、より深い信頼関係が生まれ、指導・支援内容も充実する。支援者は、母親だけを対象とするのではなく、夫婦双方を想定した家族支援を展開する必要がある。

また、中田は、「ストレスを軽減する要素として、実際のサポートよりもそのサポートを受け手がどのように認識するのか、また与え手と受け手の関係性の影響が大きい。」と述べている(柘植・井上、2007)。つまり、支援者は、発達障害児の保護者に支援を行う時は、これからどのように支援をしていくのかわかりやすく説明することが必要であり、そのためには、発達障害児の保護者が質問したり意見を言ったりできるような信頼関係が根底になければならない。友人や家族、高い専門性を持った人の存在が、発達障害児の保護者の心の支えとなっていることは明らかであり、同時に発達障害児の保護者と心の支えとなった人物との間には、強い信頼関係があると考えられる。つまり、信頼のおける人の存在は、発達障害児を育てている保護者にとって大きな存在であることは間違いないと言える。障害児の一番身近な保護者の心の声を聞くことが、支援者に求められていることであろう。

さらに、発達障害児の保護者は、障害について勉強を重ね【A01,B05,B10,D06】、そこから得た知識によって、失意を覚えたり、可能性を探したりする。そのため、我が子の発育や想像以上の成長に対して、一つ一つ喜びを感じることができる。しかし、決して障害を完璧に受容しているわけではない。障害のために、困難にぶつかることが、障害のない児童より多い。そのたびに障害児本人やその家族は、人一倍の努力と工夫を重ね乗り越えていかなければならない。その時に、我が子の「障害」について、向き合い、壁を乗り越えていく。つまり、発達

障害児の保護者を支える人の存在が大切である。

発達障害児の保護者の障害受容について、一般的によく障害受容の過程を説明するのに用いられるのは、Drotarの先天性の奇形を持つ子どもの親の心理的な反応を描いたものであり、ショック・否定・悲しみと怒り・適応・再起という、5つの状態が重なり合いながら段階的に変化していく「段階説」である。発達障害児の保護者の多くも図と同じような感情の変化を示すと考えられている(辰巳・井上,2007)。また、Drotarの段階説とは別に Olshansky(1962)の「慢性的悲哀説」があり、これは、障害児の保護者が感じる悲しみは、障害児の進学や進路などライフサイクルの節目や保護者の精神状態によって悲哀感情が湧きあがってくるという考え方である。インタビューからも、発達障害児の保護者は、常に悩みを抱えていることがわかった。また、インタビュー項目を作成するにあたって、特別支援学校のコーディネータが、「発達障害児の保護者は、完璧に障害を受け入れているわけじゃないと感じる」という発言からも、我が子の障害と悩みながら向き合っていることがわかる。

そこで中田は、「螺旋モデルにおける障害受容」を示した。その内容は、段階説と慢性的悲哀説を統合したものである。具体的には、障害児の保護者は、障害を肯定する気持ちと否定する気持ちが裏表に存在し、表面的には落胆と適応の時期を繰り返すように見えているが、どちらも受容の過程を進んでいくとする考え方である(柘植・井上、2007)。つまり、生涯を通した支援の重要性を示している。発達障害児の保護者は、我が子の障害を否定したい気持ちと肯定したい気持ちの両方を抱えながら生活していると考えられる。しかし、今回のインタビューを聞いて、必ずしも、我が子の障害を否定したい気持ちがあるわけではないと感じた。発言の中に「可愛い」や「元気が出る」という言葉があるように、我が子の障

害を否定しているのではなく、ある程度まで我が子の障害を受容でき、愛情や尊敬の気持ちが芽生えているが、我が子の将来や自らの人生を考えた時に、不安にかられ、「我が子が障害児ではなかったら、悩まないことがたくさんある」と考えてしまうのであって、それは、決して否定的な気持ちではなく、自分と向き合い、今後の支援を考えるきっかけになる気持ちだと感じた。

辰巳・井上(2007)は、親が「子どもの障害を認識するきっかけ」として上げる事項は、信頼できる専門家や支援者との出会いであると述べている。したがって、支援する側は、発達障害児の保護者の信頼を得る姿勢や行動を示し、保護者も含めた支援方法を考えなければならない。中田は、「発達障害における家族支援の根本は、親を発達障害のある子どもの支援の協力者として捉えるところにある」と述べており、発達障害児の保護者も含めた支援は、非常に重要であると考えます。今回のインタビュー調査から、障害受容をしているように見えて、発達障害児の保護者は日々、悩み、葛藤しながら歩んでいることがわかった。

次に、心の支えの存在との繋がり確保の問題点が伺えた。それは、Aさんのように仕事を持っている発達障害児の保護者は、親の会に参加し、気持ちを分け合ったり、様々な機関を利用して、ゆっくり話をしたりする時間はないということである【A02】。そのため、Aさんは、孤独を感じている。そこで、必要になってくるのが、家庭訪問や面談の機会がある学校の教員が、保護者の気持ちを受け止めなければならないことである。だが、実際そこまでの支援ができていないのが現状である。また、教員を始めとする支援者は、発達障害児の保護者に支援内容や支援機関の情報だけを伝えるのではなく、提供した情報の使い方や支援・指導方法を共に考える意思を伝えることが重要である。

発達障害児の保護者の障害受容は、その人の性格や生活環境の障害理解度が関係する。「息子が可愛いと思えて幸せ」と B さんは言っている。B さんは実際に、発達障害児の親の会などに参加した際に「なぜ自分の子がかawaiiと思えるのか分からない」と質問された経験がある【B04,B14】。そのことに対して、B さんは、正直残念に思っており、他の発達障害児の保護者にも、我が子がかawaiiと思える幸せを味わって欲しいと思っている。また、B さん、C さん、D さんは、発達障害児の保護者を「障害を全く受け入れられない人（認めたくないタイプ）」「我が子の障害をある程度まで受け入れている人（我が子に障害があるのを隠したいタイプ）」「少しでも障害があることを前面に出して、理解してもらいたい人」と分類している【B15,C03,D08】。その 3 つのタイプの内、自らを「少しでも障害があることを前面に出して、理解してもらいたい人」と自己分析している。それは、発達障害児の保護者が集う親の会などを通して、様々なタイプの保護者と出会ってことによって、自分を見つめ直すきっかけとなったと考えられる。そのため、発達障害児の障害が目に見えないからこそ、多くの人に伝えていかないといけないと考えている。

## 第2節 学校との話し合い

ここでは、以下の3つの点について考察したい。

①我が子の進学先を発達障害児の保護者が、通常学校を選択した理由とその背景

②進学するにあたっての学校・教員との話し合いの結果

③入学後の発達障害児の保護者と学校・教員との話し合いの結果

まず、①の我が子の進学先を発達障害児の保護者が、通常学校を選択した理由とその背景について考察する。今回インタビューを受けてくださった4名の発達障害児の保護者に共通した理由として「地域とのつながり」という考えが見られた【A07-A08,B19-B21,C10,D10-D11 など】。特に、義務教育の間に、地域や我が子と同世代との関わりを考慮していることがわかる。義務教育の間に障害のない児童と出会うことにこだわった発達障害児の保護者の発言には、「我が子の将来の生活において、障害のない児童やその保護者の存在の重要性【A07,A10,B19,B29,D10】」「我が子が成長し、社会に出た時に対応できるようなメンタルの強化【B28,C10,】」が読み取れた。これは、障害児にとって社会が生きにくい現状であることを示しており、自分の亡き後も生きていけるようにという思いが込められているであろう。

発達障害児の保護者が「我が子の将来の生活において、障害のない児童やその保護者の存在の重要性」について重点を置いている背景には、義務教育を通して出会う人々は自分の生活圏内に暮らしている人がほとんどであることが挙げられる。Bさんの発言からもわかるように、発達障害児の保護者は、支援者の存在の必要性を感じている【B19】。

今回のインタビュー対象者全員から、「地域とのつながり」という共通点から、通常学校で過ごすことにより、地域の人々の理解が深まると考



えていることがわかり、障害のない児童やその保護者を始めとする地域と発達障害児の交流がいかに少ないかということがわかる。その理由の一つとして、特別支援学校が、居住地と離れていることが挙げられる。

また、「我が子が成長して、社会に出る時に対してのメンタルの強化」という目的もあり、通常学校への進学を希望したということは、社会には、多くの偏見が存在し、それに苦しむ可能性があることが示唆された。そのような中でも、力強く生きて欲しいという発達障害の保護者の思いが込められていると示唆できる。さらに、Cさん、Dさんのように、発達障害児本人の意思で通常学校に進学を希望した場合もある【C09,D12】。cの場合は、「みんなと肩を並べて歩みたい」という気持ちがあり、dは、自身の家が近くにあり、通常学校が身近に感じたことが背景としてある。そして、Bさん、Cさんのように、心理士などの専門家のアドバイスを参考にした場合もある【B22,D09】。これは、日頃から、発達障害児の保護者が、専門家を連絡を取り合い、発達障害児の将来を共に考える連携の体制が取られていることが考えられる。

一方で、Aさんの発言から、毎年担任が変わっていたことが想像でき、継続した支援が行われていないことがわかる【A07】。それは、Aさんが、学校にモンスターペアレントとして、認識されていたことが少なからず関わっているだろう。学校と発達障害児の保護者の間に溝が深まるほど、発達障害児の保護者は、自らが、我が子を守らなければいけないと強く想うと同時に、学校に対しての不信感を募らせていくという悪循環を生んでいる。それは、Bさんが、専門家に相談した際に「通常学校に進学することは、それだけのリスクと覚悟が必要【B27】」と言われているように、通常学校に進学した発達障害児の保護者が抱える悩みや不安を専門家は、多く聞いていることが読み取れる。発達障害児の保護者と学校

がきちんと向き合う機会を作ることは、重要である。

さらに、先ほども述べたが、発達障害児の保護者は、通常学校に進学先を決めた後でも、我が子の障害をある程度受け入れていても悩みや葛藤を心に抱えていることがわかった【B23・B25,C11・C17,D14・D15】。その背景に、我が子にとって、最良の教育環境を選択しなければならないという思いや、特別支援学校の方が、障害について専門的に学んだ教員が多く、自立活動や身辺活動などの日常生活を過ごす上で欠かせないスキルの獲得方法についてある程度のカリキュラムも存在していることが挙げられる【B25】。教員を始めとする支援者は、発達障害の保護者に関わる際、その人が、不安や葛藤を抱えていることを把握しながら、支援すべきである。

次に、②の進学するにあたっての学校・教員との話し合いの結果について考察する。

インタビュー対象者4名とも、自らが行動して、通常学校への入学の意思を学校に伝えていたことがわかった。通常学校を初めから希望していたので、早い段階から小学校と連絡を取り、我が子が暮らしやすい環境を整えるために動いていることがわかった【A11,B31,C18,D18 など】。話し合いの内容は、保育園や幼稚園の様子、介助員の配置、将来や目標などである。Dさんの場合、同じ地区でも、介助員の配置について、学校種によって考えに違いが出た。小学校は、教育委員会が、介助員をつけることに理解を示さず、入学予定の通常学校の校長や通っていた幼稚園の園長が介助員の必要性を訴えた【D16】のに対し、同じ地区の中学校に進学する時は、学校が介助員の設置を拒んだ【D20】。このように障害理解が進み、発達障害児が過ごしやすい学校になるためには、教育委員会を始め、管理職の障害理解が不可欠である。

③の入学後の発達障害児の保護者と学校・教員との話し合いの結果について考察する。

a が通っていた学校は、障害理解が非常に低い学校だということがインタビュー結果からわかる。Aさんは、その時の気持ちを「先生の支援は不十分だったが、その分、a は、しっかりしてきたので、なんとか過ごせた。」と振り返っている。この発言から、教員に対する信頼感は、ないに等しいと捉えることが出来る。Aさんは、学校に対する啓発を行うことだけで精いっぱいな状況であった。そのため、障害のない児童の保護者に対する啓発まで、余裕がなかった。地域に根差した学校が求められているが、そこまで、学校の障害理解が行き届いていない現状がある。

また、Bさんが通っている学校のように、教員と発達障害児の保護者が、連携が取れている所でも、学年間の引き継ぎには不満を感じている【B34-B36】。Bさん自身が、教員の間に入って引き継ぎをしなかった場合、b がスムーズに新学期を迎えられているかは疑問である。また、教員としてのプライドを持たなければ、頼りがいのある教員には成りえないと考えるが、そのプライドが、相手の意見を取り入れないこととなると問題である。教員の採用試験の時に、人の意見を受け入れながら、自らの意見も主張し、一番良い応えを導きだそうとする集団討論の試験を組み込んでいる都道府県も存在している。つまり、教員は、一人で、子どもを支援・指導していくのではなく、保護者や様々な機関そして教員間で連携して、子どもにとって一番良い支援・指導を考えていくスキルが求められている。しかし、Bさんが、プライドが高く、経験豊富な教員に不安を覚えたということは、相手の意見を取り入れず、一人でやってしまう教員が多いということである。今一度、教員間の連携について見つめ直す機会が求められていると考える。

次に、保育園と小学校、他の支援機関、保護者との連携について考察する。

b の支援方法について、担任と保護者が相談して決めているので、支援内容の相互理解ができており、どちらも共通の意識を持った支援ができることにより、対象児は、学校と家での考えの違いに戸惑いを持たなくて済む。結果として、児童にとってよりよい効果を生むと考えられる。

c は、小学校では、通常学級に在籍していたので、Cさんは、障害のない児童の保護者と話す機会があった。懇談会などで、cのことを話していたので、Cさんは、「娘の事を知っている人は多いと思う。」と感じている。また、教員が、c についての障害を障害のない児童・生徒に伝えたのは、高学年だった。それまでの間、どのような障害理解がなされていたのかは疑問である。また、中学校では、Cさんにとって、障害のない児童の保護者と話す機会は、PTA 総会の時であったが、特別支援学級のクラスは、その時間に面談を行い、Cさんは、伝える機会を失った。また、Cさんは、cの他に、cと歳の近い娘（cの姉）が同じ中学校に在籍しており、そちらの懇談会に参加するとcの面談に出席できなかった経験があり、ますます、啓発の場を失った。学校側は、兄弟のことも考えて、面談の時間を工夫すべきであったろう。中学校では、c自身が、自分の障害について学校主催の弁論大会で発表したもので、少しは、周囲の理解が獲得できたと感じている。

そして、Dさんの場合、学校・教員間の障害理解に対する理解が高く、PTAの引き継ぎも個人的な引き継ぎも大丈夫だった。その背景には、小学1~4年までの一貫した支援体制が組み込まれていたこともあるが、なりより、教員自体の障害理解の関心の高さである。

4名のインタビュー調査から、学校・教員の障害理解に対する意識の

高さによって、発達障害児の保護者のストレスや学校・教員に対する信頼度も大きく変わることがわかった。障害理解は、学校・教員間で格差があり、我が子の生活環境を整えようと発達障害児の保護者自ら行動していることが明らかになった。また、学校内での連携や引き継ぎの問題として、真鍋(2011)は、異なる施設を並行しながら利用している当事者の立場を考慮に入れた議論・方法論の検討は皆無であること、移行支援の目的が、保護者の負担・不安軽減や対象児に関する情報媒体の作成に焦点が当てられており、子ども自身が新たな環境でどのように適応するかや異なる環境を利用する子どもや保護者に対して、何を目的に支援するのかという点まで考慮に入れた研究がされていないこと、支援を行う側に制限があり、支援者、保護者、専門家らの連携が取れていないことを挙げている。つまり、一貫した支援体制を築く必要がある。

### 第 3 節 学校生活に必要な理解

学校生活における必要な理解として、「教師の姿勢」「連携」「適切な障害理解教育」というキーワードが浮かびあがってきた。

AさんとCさんは、学校の障害理解が低いために、不満を感じている。例えば、Aさんは、学校に要望したことが、教員の連携や考えによって事実と異なる捉え方をされた経験がある【A22】。また、Cさんは、教員が、個別の指導計画を作成する際、本人やその家族の声を聞かないまま作成されたり【C32】、教員の障害理解がないために、cは、精神的な不安により、チックになってしまったり【C27】、発達障害児本人やその保護者に過度のストレスがかかっていることが考えられる。

一方、BさんとDさんは、学校の障害理解が高かったのも、ストレスが少なく、学校に対する信頼度も高い【B67,B73・B74,D31,D43,D59 など】。その背景として、教員の発達障害児に向き合う真摯な姿勢が、発達障害児の保護者に伝わったことが言える。それは、Bさんの場合、心理士が保育園に巡回に訪れたり、保育園の職員にアドバイスをしたり、他の機関で、bが、支援を受けている所に支援者が、見学に来たりと、積極的に、bの事を理解しようとしている姿勢が見られる。また、小学校では、bの支援・指導方法について、担任とBさんが相談して決めているので、支援内容の相互理解ができており、どちらも共通の意識を持った支援・指導ができることにより、bは、学校と家での考えの違いに戸惑いを持たなくて済む。結果として、児童にとってよりよい効果を生むと考えられる。そして、Dさんの場合も同様に、dについて理解しようとする、教員の姿勢が感じられる。さらに、Bさんの発言から、発達障害児の保護者は、例え学校に対しての要望が通らなくても教師の向き合う姿勢が感じられるので、学校や教員が十分な支援をしてくれていると

思っている【B75】。そして C さんの発言から、「どのような支援が必要か」という教員の一言で、発達障害児の保護者は、安心感を覚えることもわかった【C27】。しかし、保護者は、安心感を与えるような言葉と、実際の教員の支援に対する姿勢の方の両方を求めていることがわかる。

また、「適切な障害理解教育」を行わなければ、A さんの発言からもわかるように、障害のない児童は、間違った障害理解をしてしまう【A23・A25】。適切な障害理解教育を行うためには、学校と教員の正しい障害理解が求められる。

そして、障害のない児童の保護者について、A さんは、「幼い時の学習は、大きな比重があると思う。」と応えた。A さんは、幼い頃からの障害理解に対する知識の積み重ねが重要だと感じている。つまり、幼い頃に得た知識や体験を通して感じた感情は、後に新しい知識や体験を積んでも、簡単に変更できないということである。逆を言えば、幼い頃に間違った価値観を教えられると、よっぽど本人の感情に響くような出来事が起き、フィードバックする機会がないとその誤った価値観は継続してしまう恐れがある。教員は、自分が児童に与える影響を考えながら、教育を行うことが大切である。

一方、学校の障害理解がある B さんは、障害のない児童の保護者に対して障害理解は、ある程度されていると思っている。その理由として、保育園から b の存在を知っている人がいることや B さんの家族が、息子（b）の障害をオープンにして周囲に伝えていることを挙げている。我が子の障害を開示し、啓発を行うことは、発達障害児本人だけでなく、その保護者も過ごしやすい環境になることがわかった。その裏には、教員の障害についての理解度が高いことが大きく関わっている。教員自身が障害を理解することによって、児童生徒への対応も変わり、わけへだ

てない支援・指導をすることで、その雰囲気为学校全体に反映している  
と考える。その雰囲気は、子どもを通して、障害のない児童の保護者に  
伝わり、障害理解の高い学校になると考えられる。つまり、教員自身の  
障害理解は、障害のない児童の障害理解につながるだけでなく、障害の  
ない児童の保護者にも影響を与える事がわかる。

芝田(2010)は、障害児・者に対して適正に理解している教員は多いと  
はいえ、適正な理解どころかこのような遺憾な障害児・者観、障害に対  
するイメージを抱いている教員がまだ多いのも現状であることを述べ、  
また、教員による適切な指導、支援に感謝する保護者の声は多い一方で、  
「発達障害児童を等身大に見ず、先入観をもってその言語を判断してい  
る」など、教員に対しての嘆きや非難の声がまだ保護者から比較的多数  
聞かれているのも事実であるとも述べている。今回のインタビュー調査  
では、教員や学校に対しての諦めも感じ取れた。障害のない保護者に向  
けての啓発よりも、我が子の生活環境を整えることに精いっぱい、障  
害のない児童の保護者まで、啓発する余裕がないことがわかった。その  
ため、教員の障害理解は、非常に重大であり、教員の障害理解を深める  
ような学校の体制作りが必要だと考えられる。



#### 第4節 障害理解に関する方法と内容

Aさんは、発達障害児やその保護者をはじめとする様々な機関との連携が、教員の障害の理解度が高まると考えている。また、学校の中で、障害理解を積み重ねることは、すぐに効果は出ないが、その教養を受けた障害のない児童が、成長し、親になった時にその子どもにも正しい障害理解を伝えるので、重要だと述べている。時間はかかるかも知れないが、確実に発達障害児が暮らしやすい社会の実現を目指せる教育の在り方を学校は検討する必要がある。

また、学校で学んだ障害理解を家庭でフィードバックし、理解を深めることを発達障害児の保護者は、望んでいることも明らかになった。しかし、障害に対しての理解は、結局は個人に任せるしかない部分もあるとAさんは指摘している。障害のない児童が障害について学び、考えを深めようとする時に、その家族の障害についての関心が低かったら、家庭でのフィードバックは望めない。Aさんは、幼い頃の知識や経験は、非常に大きな意味を持っており、障害のない児童の保護者が障害について理解がなかったら、これ以上の啓発は難しいと考えている。しかし、発達障害児に対する支援・指導は、障害のない児童の力も伸ばすことにもつながっている事を伝え、「障害」についてではなく、「子育て」という視点からアプローチする方法もあると考えている。確かに、「障害」という言葉だけで、理解を進めようとしても、障害のない児童の保護者は、障害を身近に感じる事ができないので、学ぼうとする気力が湧かないことも考えられる。今後、学校は、「子育て」という、保護者にとって共通の話題からアプローチしていくことも必要である。

そして、学校によって、障害理解・啓発に関して、格差があるとAさんは感じている。その原因の一つに、障害理解教育に関するプログラム

がきちんと存在していない、または、浸透していないことが挙げられる。今後、全国共通の障害理解・啓発についての教育方針の理念や方法の確立が求められる。

Bさんは、bのことをかわいいと思っており、良いところを探そうとする。しかし、我が子の障害を受け入れる事ができない発達障害児の保護者も存在していることは明らかである。そのような保護者に対し、学校側から、その子の良いところや成長したところを伝えることによって、少しでも、我が子と向き合う機会を作る必要性があると感じている。子どもと向き合うことは、よりよい支援・指導を計画できるだけでなく、我が子の障害を受け入れることのできない保護者が抱える心の不安や悩みの軽減につながると考えられる。つまり、教員は、発達障害児だけでなく、その保護者と共に歩いていこうという意思を伝え、自らが、子どもと向き合おうとする姿勢が求められている。

Cさんは、特別支援学級の授業に対して、不満を抱えている。例えば、板書をノートに移させる授業ではなく、重要なポイントを効率よく教えると共に、授業数が少ないなど焦っている障害児に対して、「大丈夫」という安心感を覚えるような声かけを希望していることがわかった。また、我が子の将来について、発達障害児の保護者は、不安を抱えているので、保護者の相談に乗ることも、教員に求めている。次に、障害児だけでなく、いじめられている子など、社会的弱者に対して、話しあう機会が、大人も子どもも必要だと考えている。障害の定義に捉われず、一人一人に合った支援・指導を望んでいる。その支援・指導方法は、発達障害児だけでなく、障害のない児童にも役に立つということを伝えるべきであると言っている。そして、PTAが障害について講演会を行ったら、障害のない児童の保護者がどのくらい参加の意思があるのか、障害について

どのような意識を抱いているのかなど、現状を把握するアンケートを望んでおり、そこから、見えてくる現状と課題から、適切な障害理解・啓発を考えて欲しいと考えている。

さらに、障害のない児童にも、苦手科目は存在し、その科目を克服するために、特別支援学級で基礎を学ぶという授業形態があれば、自然と交流の機会が生まれ、障害のない児童も、発達障害児も苦手があるということが理解できるだけでも、障害理解につながると考えている。最後に、障害のために「できないのは仕方がない」と思うのではなく、「出来るような工夫をして欲しい」と感じている。発達障害児の保護者も手探りで子育てをしているので、教員の理解があり、アドバイスなどがあれば、励みになると考えている。

Dさんは、我が子の障害に気が付いてない保護者に対して、周囲の人が何か気が付いたら、障害について理解や気づきを促せるような環境を作る必要性を挙げている。それは、我が子の障害に気が付かずに過ごしてしまい、適切な支援を受けられる機会を逃さない目的もある。そして、通常学校に進学を希望する発達障害児はたくさんいるので、発達障害児の保護者が悩みなどを言える環境をつくること、最低でも、一クラスに一人は介助員がいることを希望している。これだけでずいぶん違うとDさんは言っているが、予算的な問題もあるので実現は難しいとも述べていた。

また、障害のない児童の保護者に対して、知る機会は大切だと考えているが、機会があっても、参加してくれなければ意味がないと感じており、障害理解について、興味のない人が、知る機会に参加してくれるかが問題であり、工夫を求めている。そして、発達障害児の保護者自身が、行動を起こさないと学校を始めとする支援機関は、動いてくれないので、

障害理解や我が子の環境整備に求めていることなどを伝えていくことが大切であると述べている。この発言から、発達障害児の保護者がニーズや想いを伝えられるような環境作りと信頼関係が学校には求められている。

以上の結果から、障害のない児童の保護者に対しての障害理解に関する方法や内容よりも、学校の体制や教員に対して、適切な障害理解を求めており、その具体的な方法や内容が多く出たことがわかった。つまり、学校や教員の障害理解は未だ不十分であり、早急に学校、教員の適切な障害理解が求められる。

## 第 5 節 今後の課題

Wing(1996)は、児童の療育訓練の効果や長期的な発達に、母親の安定した関わりが大きく影響していると指摘している。教員・学校は、発達障害についての理解を深め、障害理解に関する啓発に努めるだけでなく、発達障害児の保護者の心のケアも考慮しながら、発達障害児の保護者と共に発達障害児の今後の人生が豊かになるように将来を見据え、生きる力を身につけさせる指導・支援をしなければならない。

最後に、本研究では、対象者 4 名しか調査を行っていない点、発達障害児の保護者が、障害のない児童の保護者に対し、障害理解を適切に進めるため望んでいる啓発は、個人的な背景が大きく関わっていることから、全ての発達障害児の保護者が望んでいる啓発の方法ではない点が課題である。また、障害のない児童の保護者についての啓発の仕方を調査したのだが、学校や教員などに対しても適切な障害理解を求めている答えが多く出されている点は、留意する必要があるだろう。いずれにしても、当事者の声は、非常に貴重なものである。今後は、もっと多くの発達障害児の保護者に対して、調査を行い、望ましい障害理解に関する啓発の形を具現化していくことが必要であろう。

## 引用・参考文献

- 相川 恵子・仁平 義明 (2009) 子どもに障害をどう説明するかーすべての先生・お母さん・お父さんのためにー 株式会社おうふう.
- 赤塚 正一・大石 幸二 (2009) 通常の学級に在籍する LD のある児童の小中学校間の引き継ぎに関する実践研究 特殊教育学研究 46(5), 291-297.
- 芦澤 清音 (2001) LD 児及びその周辺児を持つ母親の適応過程 LD 研究 10(1), 48-58.
- 遠藤 理恵・平田道憲 (2010) 障害のある児童生徒の養育に関する主養育者へのインタビューー両親の性別役割分業と家庭内及び社会的ニーズについてー 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 第 59 号.
- 林 隆 (2008) 発達障害の危険因子・憎悪因子としての子ども虐待 発達障害研究 第 30 巻 第 2 号.
- 平岡 蕃 (2001) 障害の構造モデル関する一考察ー医療モデルから社会モデルへの転換についてー 久留米大学文学部紀要 社会福祉学科編創刊号 (第 1・2 号).
- 平岡 蕃 (2003) 知的障害のある人たちの自立生活アドボカシーの展開 久留米大学文学部紀要 社会福祉学科編 第 3 号.
- 芳賀 彰子・久保 千春 (2006) 注意欠陥/多動性障害, 広汎性発達障害児をもつ母親の不安・うつに関する心身医学的検討 心身医年 第 46 巻 第 1 号.
- 本田 千草・黒田 吉孝 (2007) 高機能広汎性発達障害の就学前から青年期までの発達・障害の理解と支援 (その 1)ーアンケートとインタビューによる検討ー 滋賀大学教育学部紀要 教育科学 No.57, pp.75-89.
- 本田 千草・黒田 吉孝 (2008) 高機能広汎性発達障害の就学前から青年期までの発達・障害の理解と支援 (その 2)ーアンケートとインタビューによる検討ー 滋賀大学教育学部紀要 教育科学 No.58, pp.123-138.
- 石井 恵子・上野一彦 (2008) 発達障害のある児童生徒の不登校傾向についてー情緒障害通級指導学級の実態調査を通してー LD 研究, 17(1), 90-96.
- 石野 美也子 (2006) 障害者福祉の課題(V)ー共生社会に向けてー 京都文教短期大学研究紀要 第 45 集.
- 稲浪 正充・小椋 たみ子・西 信高 (1994) 障害児を育てる親のストレスについて 特殊教育学研究 32(2), 11-21.
- 井上 由美恵 (1986) 発達障害児の早期両育体制と親のねがい 情緒障害教育研究紀要 第 5 号.
- 木谷 秀勝 (2008) 発達障害児への地域・家族支援の可能性を探るー長門市の発達障害児親の会「ブルースター」の活動から 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第 26 号.

- 楠 凡之 (2009) 発達障害児の特別なニーズと家族支援 障害者問題研究 第 37 巻第 1 号.
- 黒川 亜希子・是永 かな子 (2006) 障害理解教育の実際と課題—高知市立における取り組みを中心に— 発達障害研究 第 28 巻 第 2 号.
- 黒田 篤子・藤田 尚文 (2000) 大学生の表出する思いやりと表出しない思いやりについて—親子関係と社会的スキルの関係 高知大学教育学部研究報告 第 2 部 第 60 号.
- 小泉 令三 (2002) 学校・家庭・地域社会連携のための教育心理学的アプローチ—アンカーポイントとしての学校の位置づけ— 教育心理学研究, 50,237-245.
- 小牧 綾乃・田中 真理・渡邊 徹 (2006-07) 通常学校に在籍する特別なニーズのある児童への担任教師による支援に関する調査研究 LD 研究 15(2), 216-224.
- 前田 明日香・荒井 庸子・井上 洋平・張 鋭・荒木 美知子・荒木 穂積・竹内 謙彰 (2009) 自閉症スペクトラム児と親の支援に関する調査研究—親のアンケート調査から— 立命館人間科学研究,19,29-41.
- 茂木 俊彦 (2006) 障害とコミュニケーションをめぐる理論的課題 その視座、いくつかの視点 障害者問題研究 第 34 巻 第 3 号.
- 内藤 孝子・山岡 修 (2007) LD 等の発達障害のある人達の教育から就業に向けた課題, 必要な支援とは—全国 LD 親の会・会員調査から— LD 研究, ,16(2),214-230.
- 新美 明夫・植村 勝彦 (1984) 学齢期心身障害児をもつ祖母のストレス—ストレスの構造— 特殊教育学研究 第 22 巻 第 2 号.
- 野田 香織・福井 里江 (2008) 広汎性発達障害に関する家族支援の実施状況—家族の視点・支援者の視点から— 教心第 50 回総会.
- 奥住 秀之 (2009) 通常学級で学ぶ発達障害児の保護者からみた子どもの行動と特別な配慮 障害者問題研究 第 37 巻第 1 号.
- 小倉 正義 (2011) 小学生の母親の学校への関わりに影響を及ぼす諸要因の検討—母親への面接データを基にした仮説モデルの生成— 鳴門教育大学研究紀要 第 26 巻.
- 落合 俊郎・近江 幸治・新谷 喜之 (2009) 共生社会と特別支援教育 LD 研究,vol.18 No.1,9-23.
- 折出 健二 (2007-08) 教育における共同の思想—新自由主義に抗して— 障害者問題研究 35(2), 108-115.
- 佐藤 暁 (2004) ヒューマンケアブックス 発達障害のある子の困り感に寄り添う支援—通常の学級に学ぶ LD・ADHD・アスペの子どもへの手立て— 株式会社 学習研究社 (学研).
- 定本 ゆきこ (2009) 発達障害の子どもの育ちと家族支援 障害者問題研究 第 37 巻第 1 号.
- 芝田 裕一 (2007) 視覚障害児・者の理解と支援 (株)北大路書房.
- 芝田 裕一 (2010) 障害理解教育及び社会啓発のための障害に関する考察 兵庫教育

- 大学研究紀要 第37巻 pp.25-34.
- 庄司 知明・藤田 尚文 (1999-07) 親の価値観が子どもの価値観に及ぼす影響 高知大学教育学部研究報告 第2部 第58号.
- 神道 那実・鈴木 弘美・中恒 紀子 (2010-11) 障害のある子ども達が学校生活で抱えている問題ー保護者の調査からー 日本小児看護学会誌 19(3), 39-45.
- 宗 慧珍・伊藤 良子・渡邊 裕子 (2004) 高機能自閉症・アスペルガー障害の子どもたちと家族への支援に関する研究ー親のストレスとサポートの関係を中心にー 自閉症スペクトラム研究 第3巻 Vol.3 11-22.
- 高井 範子 (2011) ポジティブな生き方態度の形成要因に関する検討ー青年期から高齢期を対象としてー 太成学院大学紀要 13, 79-90.
- 高橋 憲二 (1997) 障害者の新しい展開ー自立と共生への視座ー 島根女子短期大学紀要 vol.35, 25~36.
- 立川 和子 就学前の教育と小学校との連携 LD (学習障害) ー研究と実践ー 第9巻 第1号.
- 田中 弘美・加藤 義男・木村 真・那須 弘明・漆畑 輝映・佐藤 正恵・鈴木 康也・三田 祐一 (2002) LD 及びその周辺児が抱える問題と支援について LD 研究, 11(1), 2-11.
- 玉井 邦夫 (2008) 発達障害と虐待状況が絡み合う事例への援助 発達障害研究 第30巻 第2号.
- 玉井 ふみ・福田 登美子・竹内 和弘・山崎 和子・堀江 真由美 (2005) 三原市および周辺地域における LD, ADHD 児等の支援の現状ーアンケート調査からー 広島県立保険福祉大学誌 人間と科学 5(1) 129-136.
- 田宮 縁、大塚 玲 (2005) 軽度発達障害児の就学にむけての保護者への支援ーS大学教育学部附属幼稚園の実践を通してー 「保育学研究」 第43巻第2号.
- 柘植 雅義 (2003) 「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」の結果と今後の教育施策 LD 研究, 12(1), 86-89.
- 柘植 雅義・井上 雅彦 (2007) 発達障害の子を育てる家族への支援 株式会社 金子書房.
- 寺田 貴美代 (2004) 「共生社会」と「ノーマライゼーション」の概念的検討 清和大学短期大学部紀要 32, 39-46.
- 富田 知栄 (2005) 障害者の自立についての研究ー自立と共生社会の実現についての考察ー 教育学科研究年報 第31号.
- 真鍋 健 (2011) 特別なニーズのある子どもの移行支援に関する研究 ー垂直的・水平的移行を包括したモデルの開発と支援の試みー 保育学研究 49(1), 85-95, 2011-08-30.
- 渡辺 隆 (2009) 発達障害のある子ども虐待事例の家族援助ー子ども虐待の親に対する心理教育的介入についてー 障害者問題研究 第37巻第1号.



- 渡辺 隆・中田 洋二郎 (2003) AD/HD を持つ子の保護者に対する心理教育についての考察 福島大学教育実践研究紀要第 44 号.
- 山岡 祥子・中村 真理 (2008) 広汎性発達障害児・者をもつ親の気づきと障害認識—父と母との相違— 特殊教育学研究,46(2),93-101.
- 山田 純子 (2008) 発達障害のある青年と親の障害理解～親の会の果たす役割植草学園短期大学紀要 9, 15-29.
- 山本 莊則・池田 聡・永田 忍・金森 裕治 (2007) 障害理解学習の現状と実践課題についての基礎的研究 大阪教育大学障害児教育研究紀要 第 30 号.
- 吉岡 綾・藤田尚文 (2000) 幼児期の対人行動に及ぼす親子関係と生活環境の効果 高知大学教育学部研究報告 第 2 部 第 60 号.
- 吉利 宗久・林 幹士・大谷 育美・来見 佳典 (2009) 発達障害のある子どもの保護者に対する支援の動向と実践的課題 岡山大学院教育学研究科研究集録 第 141 号 1-9.

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、指導教員の芝田裕一先生には、多大なご心配・ご迷惑をおかけしました。心よりお詫び申し上げます。先生の丁寧なご指導、ご助言を戴きましたことと終始温かく見守ってくださったことが、私を支えてくださり、無事本日を迎えることが出来ました。ここに深謝の意を表します。

また、特別支援教育学専攻の先生方には、講義や指導会、廊下でのお話し等を通じて、様々な角度からのご指導・ご助言を頂き、思考を深めることができました。心より感謝申し上げます。

そして、本論文を遂行するにあたって、より実りあるものになるようにと、お忙しい中、多くの出会いを紹介していただいたり、親身に相談を受けてくださったり、兵庫県立氷上特別支援学校の太田隆将先生、室山典昭先生、中村智子先生には、謝意を表します。

ご多忙の中、何度もご意見を聞かせて戴いたり、相談に乗ってくださったり、インタビューを受けてくれる方に会わせて戴いたり、どんな時もいつも笑顔で受け止めてくださった兵庫県立北はりま特別支援学校の西山雅美先生に心から感謝を申し上げます。

さらに、本研究の趣旨にご賛同いただき、協力をして戴いたインタビュー対象者の皆様には、厚く御礼申し上げます。それぞれにお忙しい中、インタビューのために時間を割いて頂いた上に、私のつたない質問に対して真剣に答えて戴き、誠にありがとうございました。皆様から戴いた、貴重なご意見を無駄にせず、学校教育における発達障害への障害理解や社会啓発に役立て、発達障害児・者ご本人やそのご家族が、暮らしやすい町になるように障害理解の躍進のために今後も研究を重ねていきたいと考えております。皆様との出会いは、普段経験できない考えや意見に触れることができ、今後、教員を目指す自分を見つめ直す貴重な時間でもありました。特別支援教育が導入され、障害のない児童や障害のない人と障害児・者が会う機会が多くなり、適切な障害理解が求められている昨今において、このような経験が出来たことは、私にとって、大きな財産になりました。心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、悩んだり、笑ったり、いつも励まし合いながら切磋琢磨した心身障害コースの M2 の皆様、どんな時もいつも近くで支えてくれた芝田ゼミの皆様、応援して下さった心身障害コースの M1 の皆様、温かい眼差しで包んでくださったコーディネータコースの皆様には、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

そして、大学院に進学することを喜んでくれ、何も言わず、ただひたすら私の体調を気遣い、側にいてくれた家族の皆様、感謝しています。ありがとうございました。

本来ならば、皆様お一人お一人に研究の成果伝える場を設け、お礼を申し上げるべきではありますが、この書面をもって感謝の意に代えさせて戴きたいと思います。児童や保護者の皆様の側で、共に成長し続ける教員を目指し努力して参ります。本当にありがとうございました。

平成 23 年度修了生

金子 萌佳